

鹿 児 島 市 歴 史 景 観 エ リ ア
夜 間 景 観 基 本 計 画

(素案)

目次

1. 本計画について	… 3
1-1. 歴史景観エリアの概要	… 4
1-2. 本計画の目的と位置づけ	… 5
2. 大切にすべき光のルール	… 6
2-1. 心地よい陰影	… 8
2-2. まちなみの明るさ感	… 9
2-3. グレアフリー	…10
2-4. 適切な色温度	…11
2-5. 高い演色性	…12
2-6. 光害への配慮	…13
2-7. 光のオペレーション	…14
3. 現状調査	…15
3-1. 調査概要	…16
3-2. 調査結果	
(1) 照国通り	…17
(2) 中央公園	…18
(3) 県文化センター前、西郷隆盛銅像	…19
(4) 市立美術館前	…21
(5) かごしま近代文学館・メルヘン館周辺	…22
(6) 探勝園	…23
(7) 歴史と文化の道	…24
(8) 鹿児島城跡、御楼門	…26
(9) 県政記念館周辺	…27
(10) 城山公園交差点、薩摩義士碑	…29
(11) 鹿児島市役所西別館棟横（市道山下2号線）	…30
(12) 鹿児島市役所本館周辺	…31
4. より魅力的な夜間景観のために	…32
4-1. 現状調査から見てきた課題点	…33
4-2. 歴史景観エリアの夜景のキーワード	…34
4-3. 歴史景観エリアの夜間景観形成の目標	…38
5. 整備イメージ	…39
5-1. 整備の基本的な考え方	…40
5-2. 「大切にすべき光のルール」の適用	…41
5-3. 整備箇所の検討	…42
(1) 照国神社線	…43
(2) 中央公園	…45
(3) 中央公民館前	…47
(4) 名山小学校前	…49
(5) 鹿児島市役所本館	…51
(6) 歴史と文化の道（モデル地区）	…53

1. 本計画について

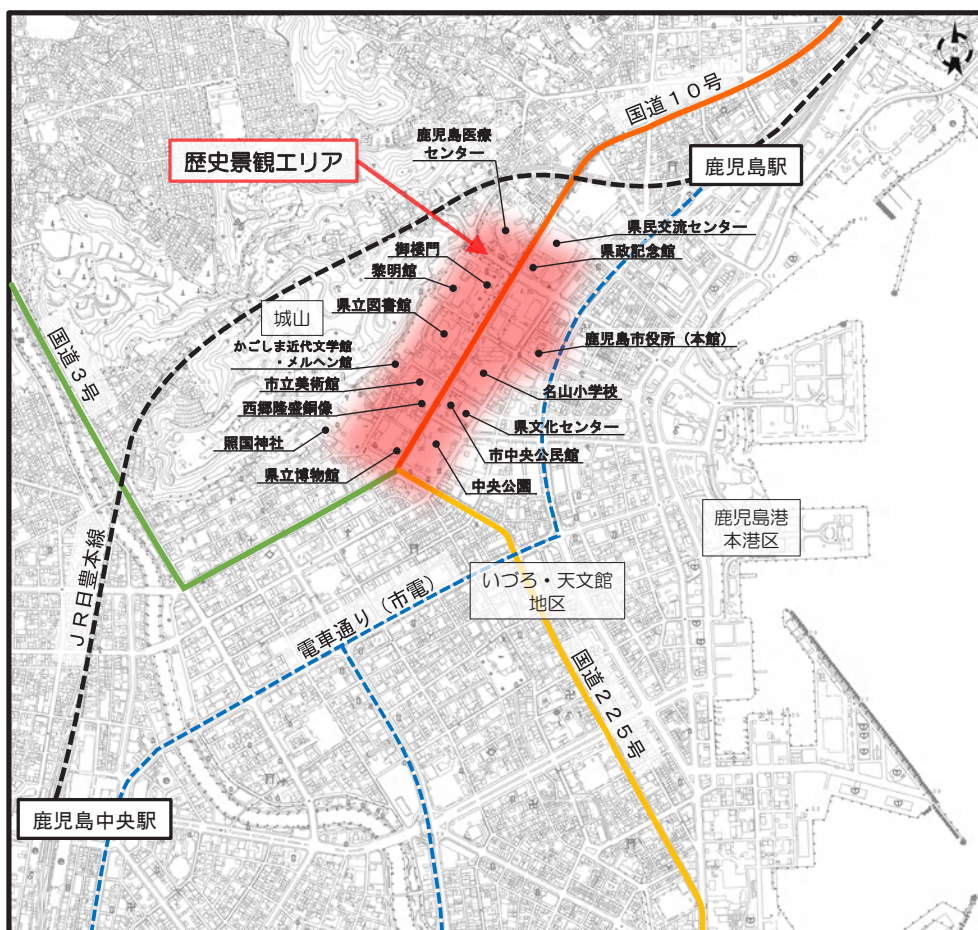
1-1. 歴史景観エリアの概要

歴史景観エリア夜間景観基本計画の対象区域は、景観形成重点地区である「歴史と文化の道地区」を基本とした範囲とする。

歴史と文化の道地区は、歴史と文化の道（国道 10 号の終点にあたる一帯）を中心とする地域で、地区の西側には城山が位置し、南側は照国神社に至る参道（市道照国神社線・国道 225 号）、北側は鹿児島医療センターやかごしま県民交流センターに囲まれており、鹿児島市の中心市街地に位置しているだけでなく、主要官庁施設や文化施設、西郷隆盛の銅像、鹿児島城跡等の多くの史跡や、鹿児島県立博物館、鹿児島市中央公民館などの登録有形文化財が点在しており、鹿児島の歴史・文化・観光の代表的な地域である。

また、鹿児島城跡石垣と調和するように、地元産の自然石（川内石）を用いた石張り舗装の歩道、鹿児島城に対面する小学校の石塀のほか、島津斉彬公が磯庭園内の石灯籠に点灯した史実に由来した幹線道路沿いのガス灯、県立博物館から県立図書館までの区間に設けた親水水路など、これまでに多数の景観施設が整備されている。

このようなことから、同地区は景観形成重点地区に指定しており、歴史と文化の道地区の歴史、文化、自然がもたらす美しい景観の保全と更なる良好な景観の形成に向けた目標や方向性、ルール等を定める地域として位置づけている。



【図】 歴史景観エリアの区域図

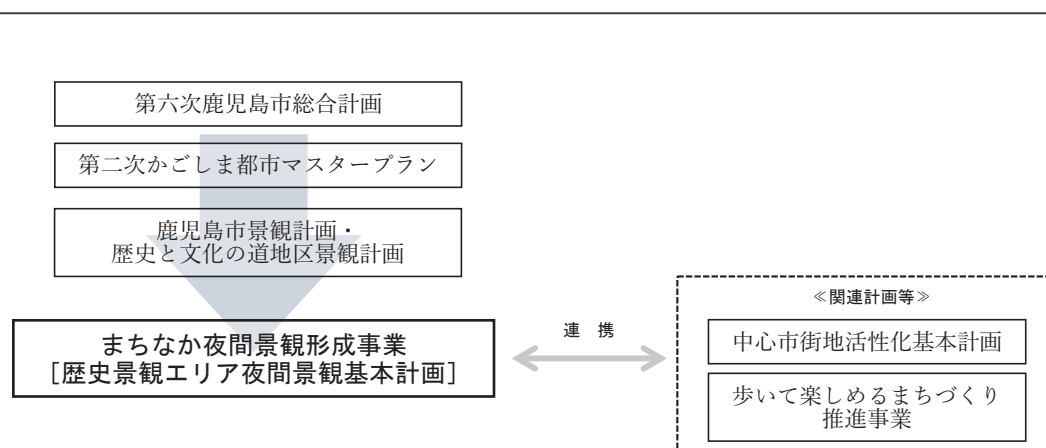
1-2. 本計画の目的と位置づけ

これまで本市においては、エリアごとの夜間景観に関する計画がなかったため、各所管部局による公共施設等のライトアップ等は局所的な整備に留まっており、面的な連続性や夜間の回遊性が乏しく、夜の観光資源として十分に活かしきれていない状況である。

本計画は、歴史景観エリアにおいて、ライトアップや街路灯の整備などを行うことで、市民参加による新たなにぎわい創出や愛着と誇りが持てる夜間景観の形成を図ることを目的とした夜間景観の基本計画である。

なお、まちなか夜間景観形成事業は、第六次鹿児島市総合計画や第二次かごしま都市マスタープラン、鹿児島市景観計画を上位計画とし、実施するものである。

また、その他の関連事業として、にぎわいあふれるまちづくりや回遊性の向上などを図るための中心市街地活性化基本計画及び、歩いて楽しめるまちづくり推進事業とも連携しながら実施するものである。



〔鹿児島市景観計画（抜粋）〕

第2章 良好な景観の形成に関する方針

第2節 景観形成の基本方針

③誰もが安心して暮らせる景観づくりを推進します。

誰もが利用しやすい都市空間は、良好な景観を構成する重要な要素の一つです。

ゆとりあるまちなみづくりやバリアフリー化を進め、誰もがいきいきと活動できるまちをつくる必要があります。このことを踏まえ、市民が誇れるひとにやさしい景観の創出を推進します。

また、街灯の設置や施設のライトアップなどにより防犯性など夜間の安全性の向上と夜間の景観の魅力向上を促進します。

〔歴史と文化の道地区景観計画（抜粋）〕

序章 景観形成の考え方

第2節 景観形成の考え方

3 歴史と文化の道地区の景観計画策定の基本的な考え方

(1) 策定にあたっての視点

④歴史的情緒溢れる夜間景観

夜間、歴史と文化の道はガス灯が灯り、県政記念館・鹿児島市中央公民館といった登録有形文化財はライトアップされ、ロマンチックで魅力あふれる空間となっています。

これらの史跡を中心とした一体的な夜間景観の形成を目指します。

【図】計画の位置づけ

2 . 大 切 に す べ き 光 の ル ー ル

心地よく魅力的なまちなかの光環境をつくるために、
まずは技術的な視点から光の特徴を理解することが重要です。
そこで、夜間景観を検討するにあたり配慮すべき基本的原則を7項目にまとめ、
「大切にすべき光のルール」として設定します。

1. 心地よい陰影 - 必要十分な光で、美しい陰影を大切に -
2. まちなみの明るさ感 - まちなみを惹きたて、印象付ける -
3. グレアフリー - 不快なまぶしさを取り除き、目に優しい景色をつくる -
4. 適切な色温度 - あたたかみのある明かりを用いる -
5. 高い演色性 - まちの表情を夜にも豊かに見せる -
6. 光害への配慮 - 自然の暗さを尊重し、環境や夜空を守る -
7. 光のオペレーション - 時間帯や季節に応じて光が変化する -

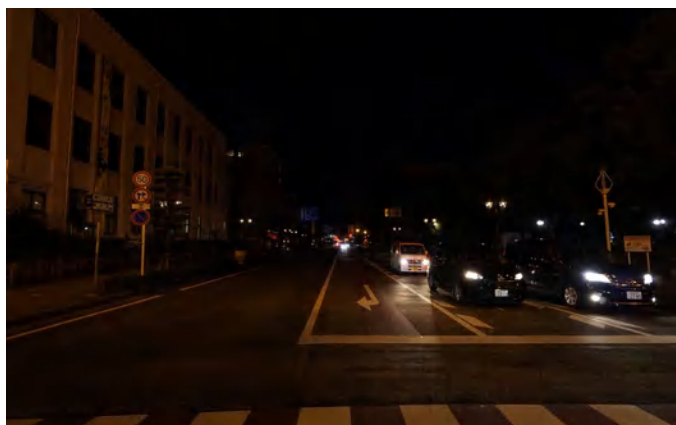
1. 心地よい陰影

必要十分な光で、美しい陰影を大切に

周囲が暗すぎる光環境は、安全・安心という都市照明に求められる第一の機能を満たしていない点で非常に問題だが、なにもかもが煌々と照らし出された明るすぎる光環境も、情緒や魅力に欠けた空間となり、夜の安らぎを人々から奪ってしまう。

美しい景色には主役と背景のバランスが重要であり、夜景に置き換えるとそれは光と影の関係となる。人々が集う場には賑わいと安心感をもたらす明るさが必要だが、憩いの空間には落ち着いた暗さが求められるといったように、機能的に必要な場所と景観要素に対し、それぞれに最適な光をきめ細やかに与えていくことが重要である。

場所と用途に合わせて照明を配置することで、美しい陰影に富んだ魅力的な景色ができる。



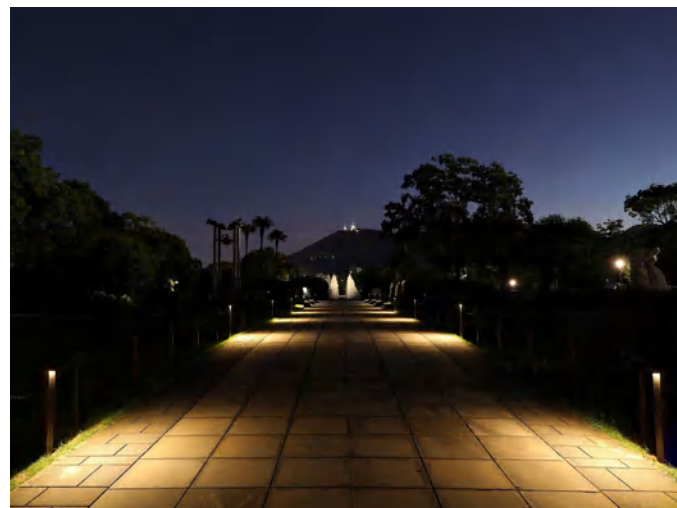
照明の光が届いていない範囲が多く、非常に暗く感じられる道路。



際立って輝度の強い看板照明があり、対比で余計に周囲が暗く感じられる。



歩行空間や周囲の建物に適切な明るさが与えられている街路空間。



リズム感のある光のバランスにより、軸線の先にある景色が際立つ。

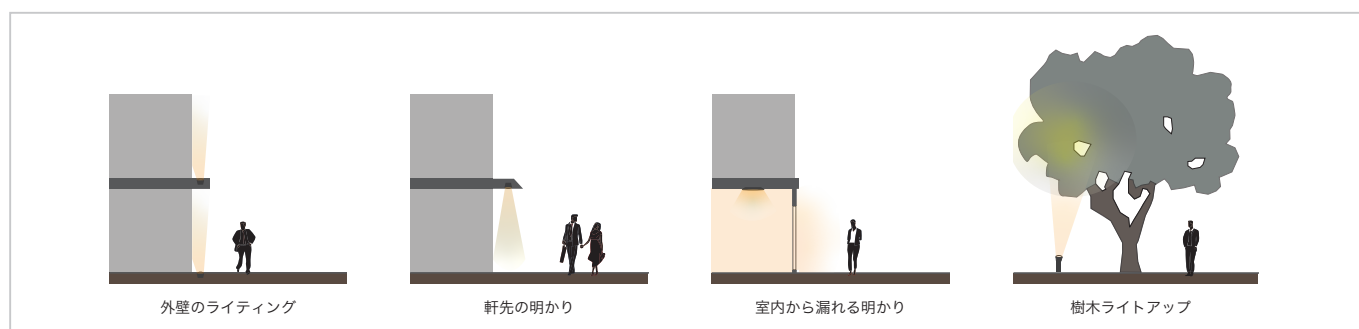
2. まちなみの明るさ感

まちなみを惹きたて、印象付ける

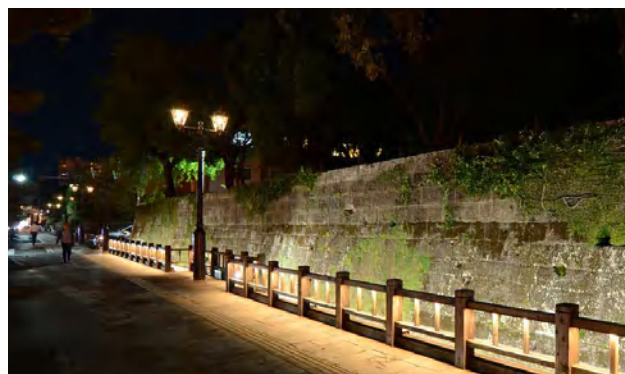
わたしたちの感じる「明るさ感」や「快適性」は、視界に占める発光面積に影響されている。特に鉛直面（壁面などの地面に対して垂直な面）は視界に入りやすいので、建物のファサードや樹木などを照らすと、地面を照らすよりも効果的に空間の明るさ感をつくることができる。

視線を集めるポイントに明るさをつくることで、暗闇に隠れていた空間がめざめ、安心感と奥行きを感じさせる印象的な夜間景観が形成されていく。

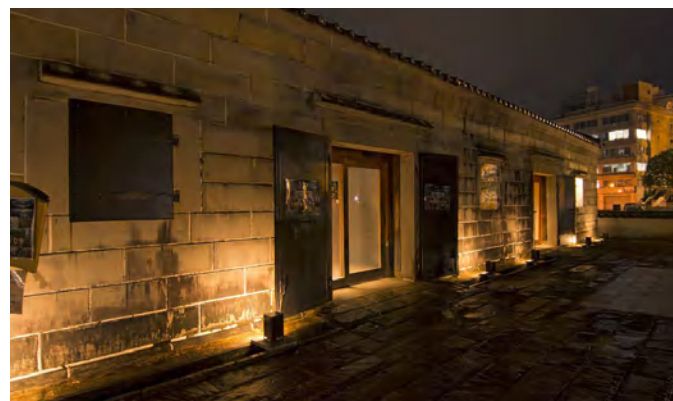
また、路面の照度を得るためにむやみに照明を増やすのではなく、鉛直面を活用して明るさ感を増すことを意図した計画は、結果として少ないエネルギーで快適な光環境をつくることにつながる。



鉛直面の明るさを与えるための照明手法の例



手すりの照明に加えて石垣もライトアップし、鉛直面の明るさをまちなみに与えた例。心地よく歩ける歩行空間が続く。



建物や樹木のライトアップにより、明るさ感が形成されている例。路面を照らす照明が少なくても、不安感を感じずに空間の奥行きを把握することができる。

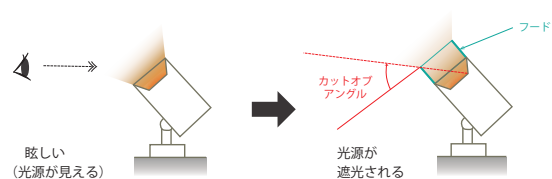
3. グレアフリー

不快なまぶしさを取り除き、目に優しい景色をつくる

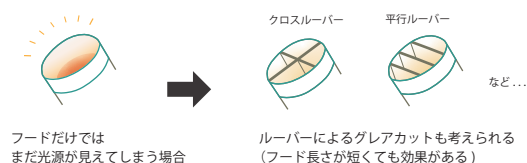
グレアとは、不要かつ不快なまぶしさのことである。人間の目は視界の中で明るいところに注意が向く特性があるため、夜景を楽しみたい場所にグレアがあると周囲の邪魔になり、美しい景観を台無しにしてしまう。まちなみにおけるグレアの代表格は、光源がギラギラと過剰な光を放っていたり、遮光をおろそかにしている照明器具である。

目を刺すようなまぶしさの照明器具が目立つことのないように、まずは都市照明の品質の基本として、グレアに対する評価を行うことが必要である。

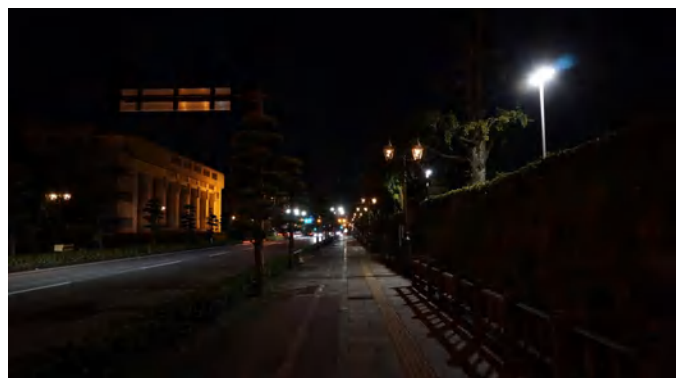
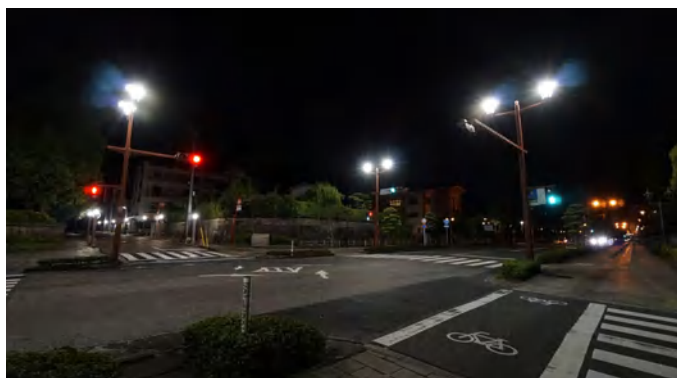
照明器具の照射方向に注意したり、フードやルーバーによって光源が適切に遮光された照明器具を選ぶことで、グレアの軽減が可能となる。また、拡散光型（器具自体が柔らかく発光する）の器具の場合は、表面輝度をきちんと管理することが求められる。



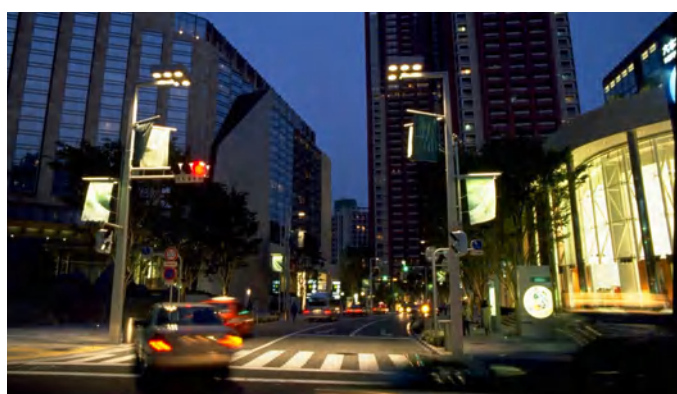
フードによるグレアカットの考え方



ルーバーによるグレアカットの考え方



グレアがひどい照明がある景色。ポール灯において、グレアカットや輝度への配慮がなされていないところが目立つ。



グレアに配慮された光環境の例。遠くまで街路空間を見通すことができ、周囲の景観が心地よく感じられる。

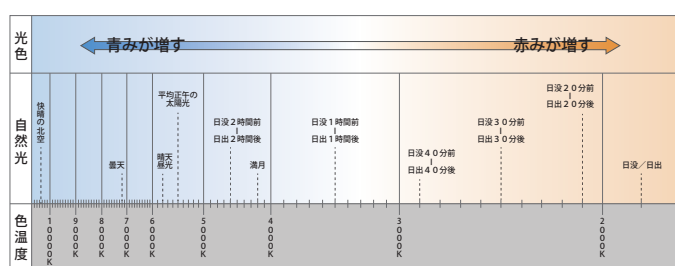
4. 適切な色温度

あたたかみのある明かりを用いる

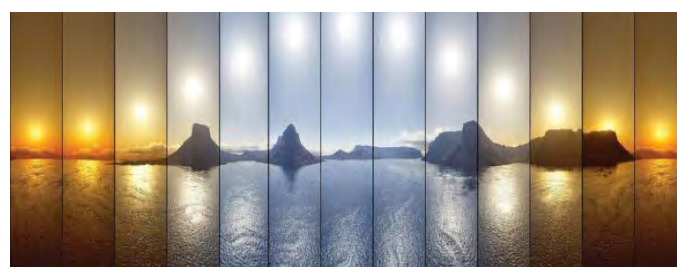
光源は固有の色味をもっていて、それを表す数値を色温度という。昼間の太陽光に近い青白色や白色の光は色温度が高く、白熱電球に近いオレンジ色の光は色温度が低い。

一般的に、人は色温度の高い光の下では高揚感や緊張感を感じて活動的になり、色温度の低い光の下では、暖炉や焚火に集うような安らぎを感じてリラックスすると言われている。空間の印象を大きく左右する色温度の使い分けや統一は、場所や用途に応じて意識することが大切である。

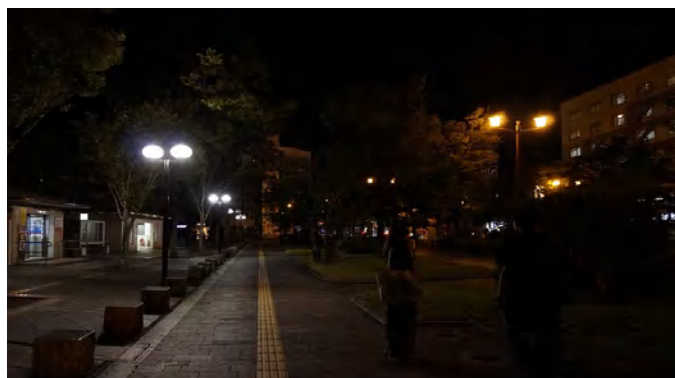
たとえば、活動的なエリアと比べたときに、歴史あるまちなみのエリアでより低い色温度を用いたほうが、情緒ある雰囲気を惹きたてることができる。



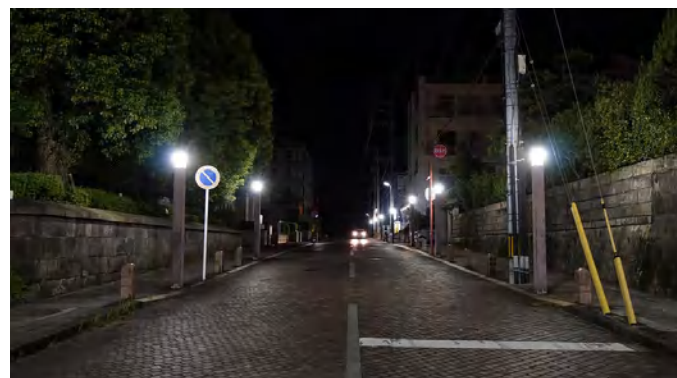
色温度の考え方



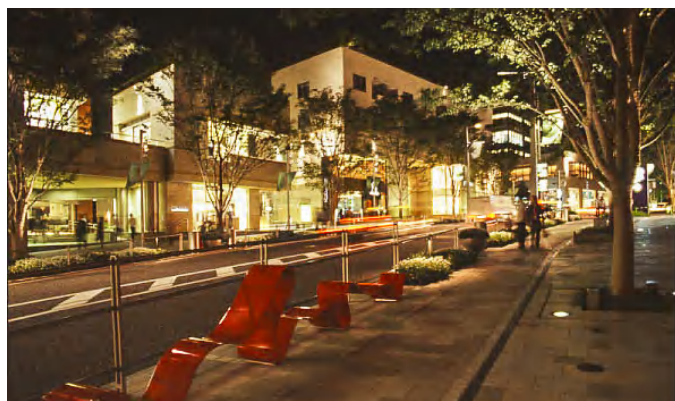
自然光（太陽光）の色温度も1日の間に変わっていく



異なる色温度の照明が用いられ、統一感のない街路空間に感じられる例。



高い色温度の街路灯が並ぶ通り。白々しく、冷たい印象を与える。



道路照明、建物や樹木のライトアップまで、色温度が統一されている街路。



歴史のあるまちなみの明かりを、あたたかみのある低い色温度で統一した例。

5. 高い演色性

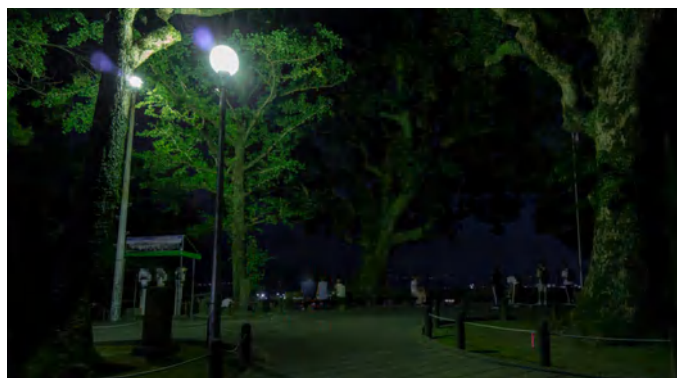
まちの表情を夜にも豊かに見せる

赤い花を白熱電球で照らした場合は鮮やかな赤色に見えても、ナトリウム灯の下で見ると、赤色ではなく枯れたような灰色に見える。このような、光源による色の見え方（再現性）の違いを評価する指標が演色性である。光の基準とされるのは太陽光や白熱電球の光で、これらの光に照らされた見え方に近いほど演色性の数値が高く、自然な色味に見えているということになる。一般的に、Ra80以上の光であれば実用的に色彩を判断できるとされる。

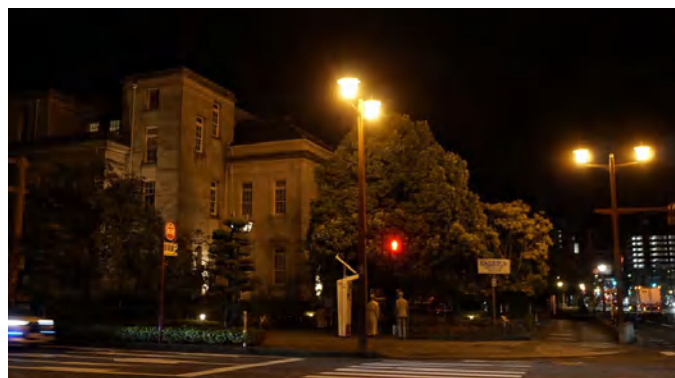
市内でも多く見られるナトリウム灯や水銀灯は、演色性が低いものが多く、これらの光に照らされることで夜の景色が色あせて見えてしまう。演色性に配慮して照明器具を選定することで、まちなみ、緑、人々の表情といったあらゆるものを色彩豊かに見せることができる。



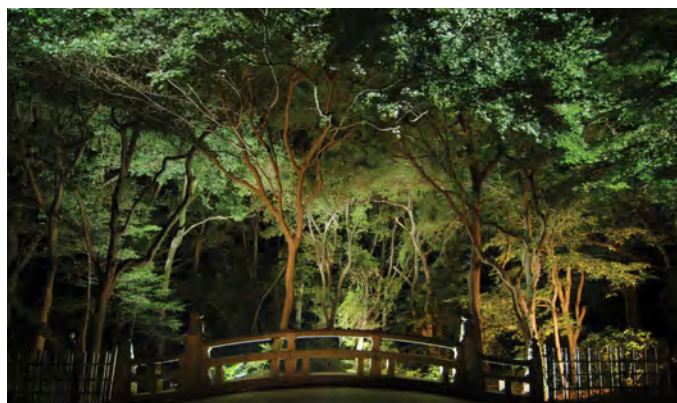
演色性の違いのイメージ（左は Ra90、右は Ra75 の光源）



演色性の悪い水銀灯の例。陰鬱で緑がかった印象の空間になる。



演色性の悪いナトリウムランプの例。とくに樹木や植栽の緑が色あせて見える。



演色性の高い光源によってライトアップされた樹木。



演色性の高い光源によってライトアップされた建物と植栽。

6. 光害への配慮

自然の暗さを尊重し、環境や夜空を守る

これからの都市照明においては、地球環境に優しいか、無駄な光や障害となる光はないか、省エネを十分考慮しているか、というような、未来への持続性を見据えた照明計画が求められている。LED は高い効率性を持つ省エネ光源ではあるものの、その効率の良さに甘んじて必要以上に過剰な光を発することは望ましくない。無駄な光を周囲に放つことは、上空まで漏れた光が星空を見えにくくしてしまったり、自然環境や周辺の居住環境に悪影響を及ぼすなどの光害（ひかりがい）の原因になる。

市内中心部にありながらも豊かな自然が残されている環境を守るため、自然界の夜を尊重できるように、環境と光害に配慮した照明器具の選定や運用を行うことが必要である。



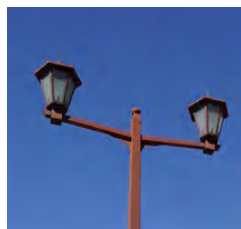
必要なところだけを照らすように配光制御された照明器具を選定することで、夜空や周囲の住宅に無駄な光を発することなく歩行空間を照らすことができる。

発光型



全体が発光する灯具形式。見た目の明るさ感を演出したり、動線上の誘導効果も合わせ持っている。全方位に光を発するため、グレアの原因となりやすく、輝度が強くなりすぎないように配慮が必要。暗い場所や住宅地付近での設置を検討する際は、製品の配光を確認のうえ、灯具の高さや光源 W 数の選択も慎重に行うことが求められる。

笠型



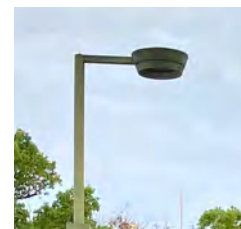
笠のある形状で、上方への光束が抑制された灯具形式。発光型と同様に、明るさ感や誘導効果を与えることもできる。夜空への影響は抑えられるが、光源や発光面が歩行者からは目に入りやすいため、輝度が強くなりすぎないように配慮が必要。灯具の高さや光源 W 数の選択も慎重に行うことが求められる。

セミカットオフ型



反射板や笠などによって、上方に光が発されないよう配光制御された灯具形式。比較的、グレアに配慮がされており、車道等においては均斉度の確保も計画しやすい。W 数の大きい光源を選択すると、グレアが増すことがある。現場周辺の状況（交通状況、地域特性）を考慮しながら、灯具仕様や配置間隔を計画することが望ましい。

カットオフ型



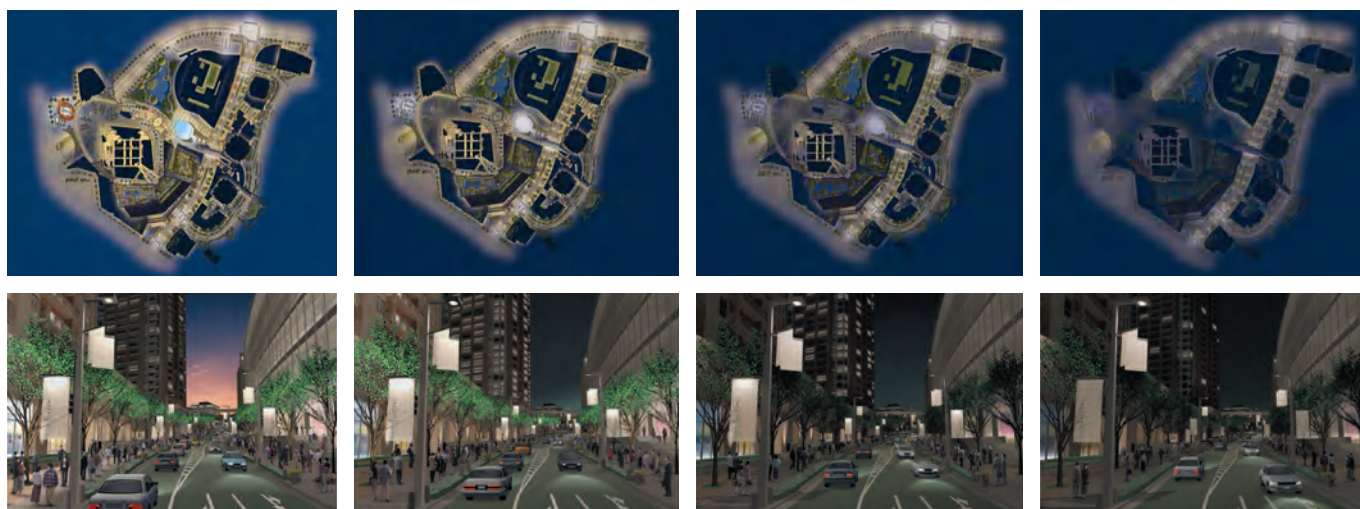
反射板や笠などによって、効率よく下方のみを照らすよう配光制御された灯具形式。省エネルギー効率とグレアレス性能に優れる。効率的な均斉度確保という点ではセミカットオフ形より劣るため、車道等では採用が難しいこともあるが、意図したところだけを照らせるため、周辺環境に調和した照明計画を行うことができる。

7. 光のオペレーション

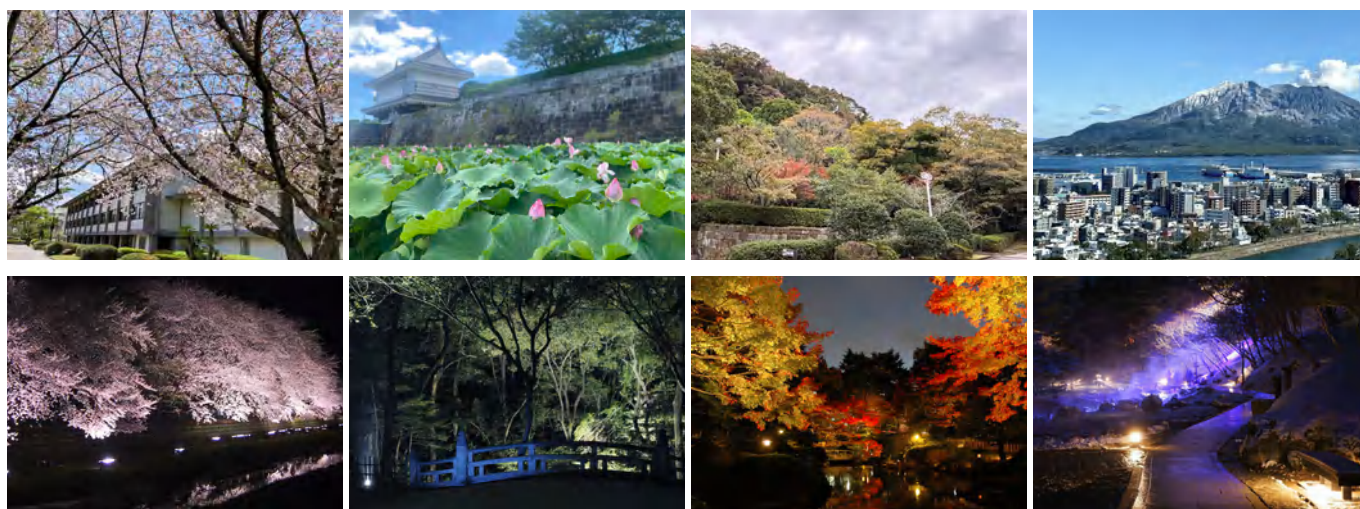
時間帯や季節に応じて光が変化する

オペレーションとは「操作・運用」という意味の言葉。自然光が季節や時間によって表情を変えるように、人工光に対しても緩やかで上品な光の変化を計画し、適切に操作することで、時間のうつろいを感じられる光環境が生まれる。一日の間の変化だけでなく、四季折々に移ろうまちなみに合わせて、桜や新緑、城跡の蓮、紅葉や祭りなど、季節に応じた演出も積極的に導入することで、より表情豊かな夜景を楽しむことができる。

また、一晩中ずっと照明を点けておくことは、エネルギーの無駄遣いのみならず、夜間の生活環境や生態系に対して悪影響を及ぼす原因になるため、必要な時間帯と用途に合わせたライトダウン（減灯）を意識することもオペレーションの重要な役割となる。



街区全体の時間に応じたライトダウンを計画したイメージ図。



四季を感じさせる照明演出の例。

3 . 現 状 調 査

3-1. 調査概要

歴史景観エリアの夜間の光環境を把握するため、公共施設や歩行空間を対象として、光環境（照度、色温度等）の測定等を行い、エリア内の回遊性や快適性の現状を調査する。

対象範囲のうち11箇所について、代表的な画角から各所の昼間と夜間の様子を撮影し、昼夜での印象の変化を比較するとともに、それぞれの地点の光環境について、夜間の路面照度や代表的な照明の色温度をまとめ、分析する。

・使用機材の例



・用語について

■照度…単位面積当たりに入射する光束の量を表す数値であり、光によって照らされる面の明るさの程度を表す。

単位には Lx(ルクス) が用いられる。

JIS においては、住宅地の通路や公園・広場で 1 ～ 10Lx 程度、市街地の通路で 5 ～ 30Lx 程度が参照値である。

ただ、十分な照度であることだけが歩きやすい光環境の絶対条件というわけではない。

例えば、満月の夜は月明かりで 0.2Lx…といったように、夜間の心地よさは周辺の雰囲気や明るさ感にも依存する。

■色温度…光源固有の色味を表す数値のこと。色温度が低いほど暖色系の光、色温度が高いほど寒色系の光を示す。

単位には K(ケルビン) が用いられる。

ろうソクの炎は 1900K 程度、日中の自然光は 5500 ～ 7500K 程度、晴天の青空の色は 10000K 程度。

■輝度…ある特定の方向に対する光の強さ(面積あたりの光度)を表す数値であり、

人の目に飛び込んでくる明るさや光の強さを指す言葉として用いる。

単位には cd/m²(カンデラ / 平方メートル) が用いられる。

■グレア…不要かつ不快な眩しさのこと。

■演色性…光源による色の見え方(再現性)の良し悪しを評価する指標のこと。

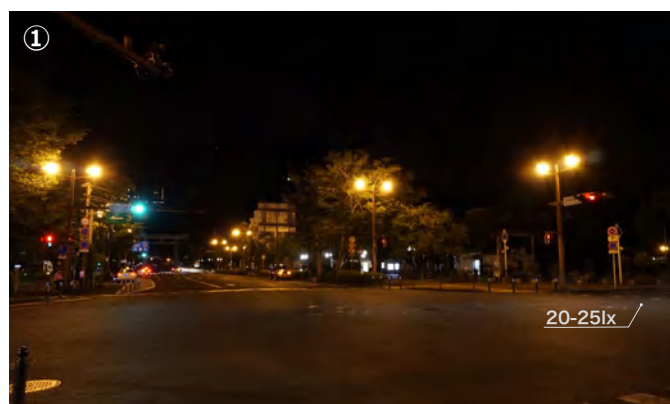
単位には Ra(アールエー) が用いられ、基準光で見た色を Ra100(満点)として、それに対する忠実さを数値化する。

(1) 照国通り

歴史景観エリアへの入口となる場所のため、まちなかのぎわいを繋ぎ、期待感を抱かせるような景色をつくることが望ましい。



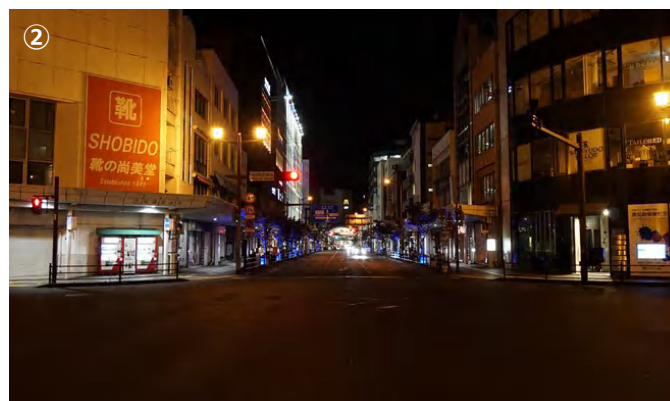
照国町交差点。昼間は、照国神社の大鳥居や緑豊かな自然の気配が、広い交差点を前景として期待感を抱かせる。



夜には演色性の悪いナトリウムランプの街路灯が高い位置で光るのみで鳥居や緑の存在感は感じられず、そちらに向かおうという気持ちを抱きにくい。



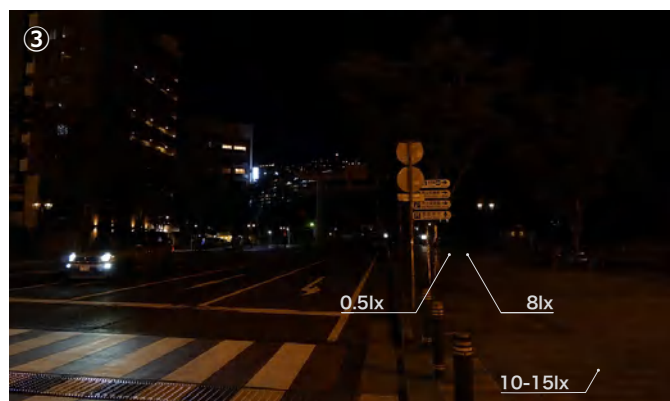
神社側から見る照国表参道。



季節のライトアップや、統一感のある店先の意匠など、地元の方々によって参道の整備が行われており、歩く楽しさがある。



照国神社前の交差点。

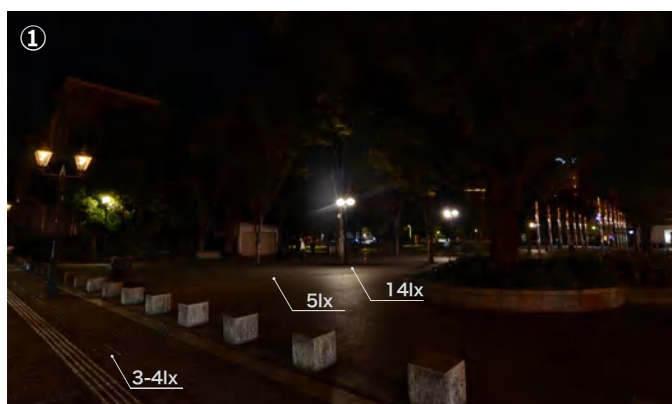


昭国神社の周囲は、夜には闇に沈んでいて、鳥居の存在も見えない。

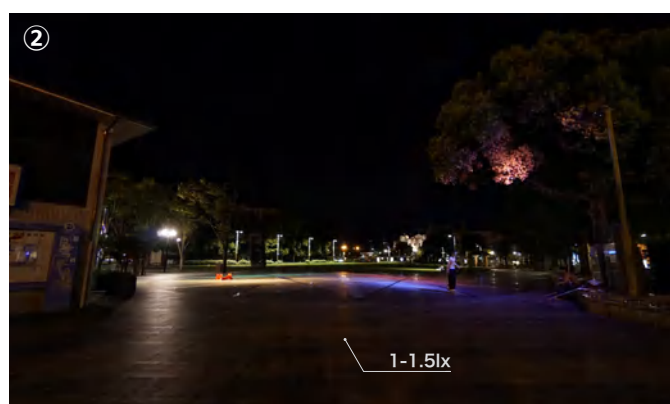
(2) 中央公園

年間を通じてイベントなどにも利用され、人々の憩いの場となっている中央公園。整備された地下駐車場の利用者も多く、まちなかから歴史景観エリアへと人々を招き入れる場所に位置する場所でもある。

広々とした芝生と豊かな緑が心地よい公園だが、夜には樹木がすべて影となっていて奥行きがわからない。歩行のための機能的な明るさを担保している街路灯も、場所によって光り方や明るさがまちまちで統一感がなく、グレアを感じさせる箇所がみられる。夜にも憩いの空間として人々を迎えるためには、暗がりへの不安感やグレアによる不快感を感じずに、安心して歩ける心地よい光環境が必要である。



輝度対比により周囲を暗く感じてしまうポール灯のグレアや、明るさのバランスを改善することで、心地よく歩ける空間になり得ると感じる。



友好都市を象徴する四色のカラーライティングには唐突な印象を受けたものの、周囲の暗さとの対比もあって舞台照明のようで、祝祭的な面白さがある。



ナポリゲートのシンボルライトポールは、人々を出迎えるゲートとして明かりが配されていることの重要性を感じることができる。



夜間は、照度の差が大きいため、周辺の暗さが逆に際立つ印象にもなっており、連続する歩行空間を一体的に考慮して陰影のバランスをとることが必要である。



広々とした芝生広場は、頭上に空も開け、都市のオアシスになっている。気候の良い日には非常に多くの人々にぎわっている。



芝生広場を照らすポール灯は十分な明るさで、グレアの制御も好ましかった。ただ、照明の直下と光が届いていないところとの照度の差が大きく、影になっているところが対比によって暗く感じられてしまう。

(3) 県文化センター前、西郷隆盛銅像

緑に囲まれた西郷隆盛銅像はシンボリックなランドマークとして、訪れる人々や行きかう車を見守っている。中央公民館や西郷隆盛銅像ではライトアップが行われており、夜のまちなみに明るさ感を与えているが、その対象だけが浮かび上がるようにライトアップされていることで周囲が逆に暗く感じられてしまう印象もあったため、周辺的环境への連続性も意識しながら、面的に明かりをつなげていくことが望ましい。



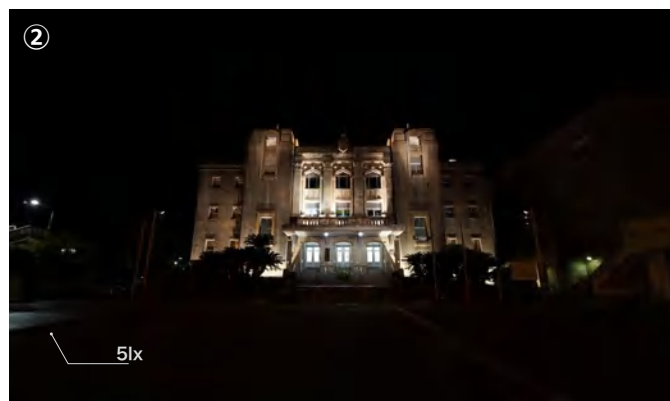
西郷隆盛銅像を背景に写真を撮ることができるフォトスポットは、花壇も整備されていて、多くの観光客が立ち寄るまちかどになっている。



夜には、とくに撮影しやすいような明かりはなく、車道用の街路灯から届くナトリウムランプの光が広がっている。



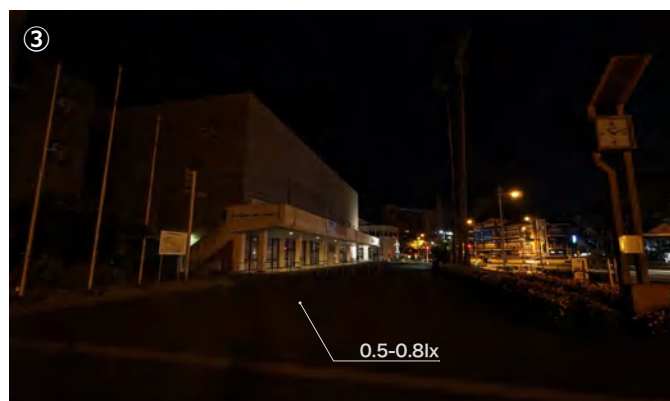
ライトアップが行われている中央公民館。



周囲から浮かび上がるような夜間のほうが印象に残り、美しく見える。路面照度の値はかなり低いですが、照らされた建物によって空間全体の明るさ感を得られているため、不快な暗さではない。



県文化センターの前まで開けている広場。奥には小松帯刀像が立つ。



県文化センターのファサードには特にライトアップはされておらず、周囲の街路灯の光を少し受けていた。奥に行くほど光が届かなくなっている。

(3) 県文化センター前、西郷隆盛銅像



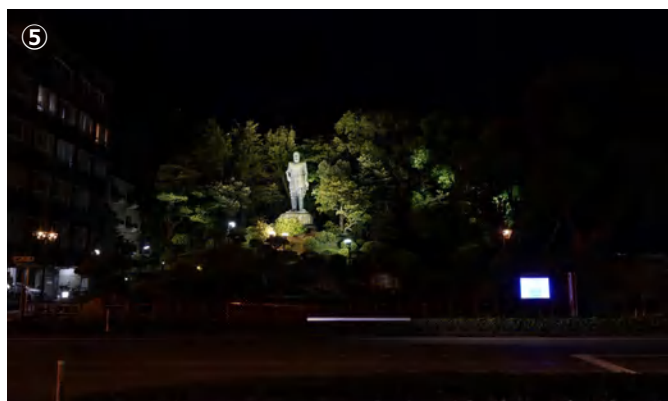
広場の突き当りにある小松帯刀像。夜のライトアップは、目線の高さに近い位置の投光器で照らされていて、光源のグレアが目に入りやすく、非常にまぶしい。



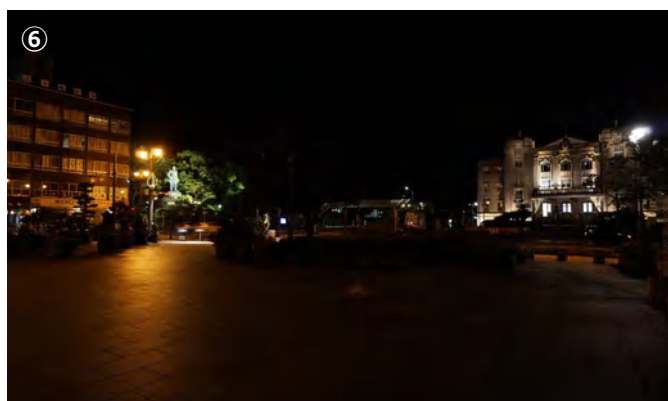
配光制御された灯具ではないために、対象の周辺一帯に光が届いている。結果として、銅像よりも建物の白い壁のほうが目立っており、何を照らしたいかの意図が明確ではない。



西郷隆盛銅像。十分な量のスポットライトが設置され、夜には遠方からも視認できる明るさで照らされている。スポットライトの灯具そのものは、昼間にはもっと目立たないほうが望ましいと感じる。



銅像も周囲も一度に明るくする照らし方ではなく、足元の低木や周囲の樹木も考慮した陰影のバランスをつけていくと、より西郷隆盛銅像の威厳や表情が感じられるようになると思う。



中央公園側から、西郷隆盛銅像や中央公民館のライトアップを眺める。ライトアップ施設を単体で考えるのではなく、まちなみに奥行きをつくり、歩きたくするようなアイストップをつなげていくことが重要である。

(4) 市立美術館前

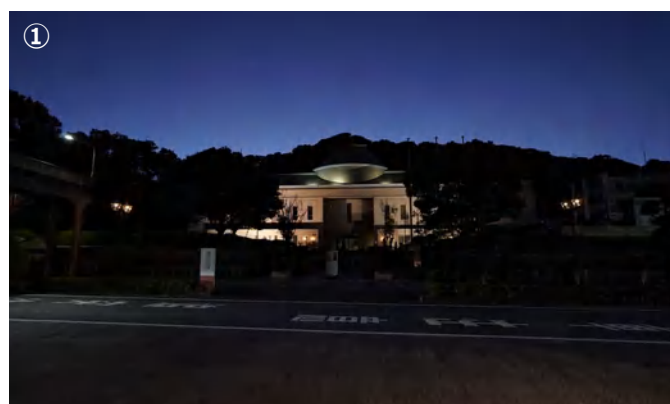
収蔵された美術品だけでなく、入口のアトリウムが印象的な建築や、庭の彫刻作品などを含めて、アートに触れることのできる鹿児島市立美術館。

西郷隆盛銅像の横に位置する市立美術館は、歴史景観エリアの文化的な顔となっている。

夜にはライトアップが行われており、点灯している時間帯には、道路からもその存在を印象的に感じることができる。



道路をはさんだ向かい側から美術館を眺める。



建物がライトアップされている時間帯には、道路をはさんだ向かい側や少し離れたところからも、美術館の存在がよく見える。



石垣の高さは県立図書館の周囲よりも低く、美術館の前景として基壇のようになっている。

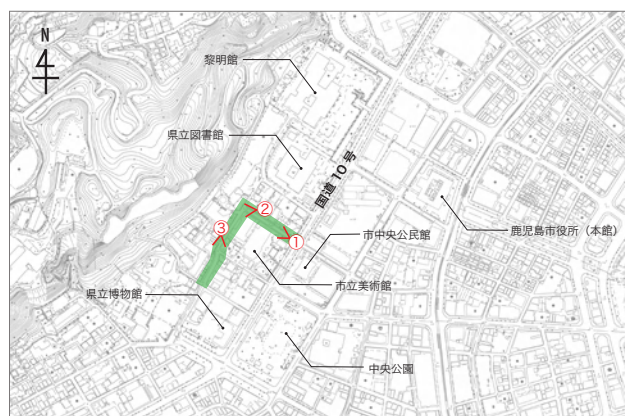


美術館の建物だけでなく、敷地内の樹木や石垣といった周囲にも目を向けることで、より景色として印象深い夜景を演出することができると思う。

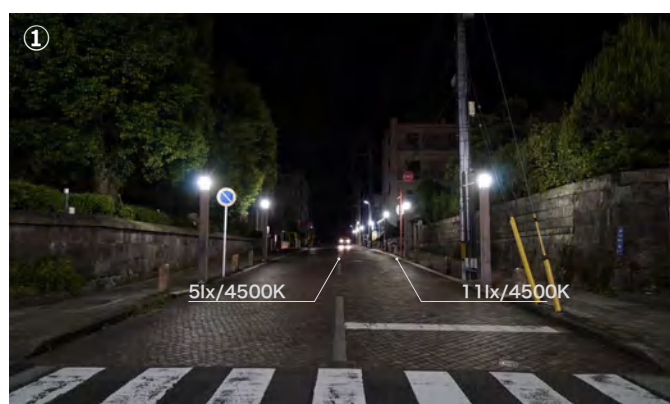
(5) かごしま近代文学館・メルヘン館周辺

国道である歴史と文化の道を一本入った通りは、周囲に暮らす人々の生活動線としての表情が強く感じられる。石畳の舗装や、近くに迫る城山の緑を感じながら歩くには気持ち良い通りだが、夜間は非常にまばらな防犯灯の明かりしかなく、日常的に通行していても安心感を抱きにくい印象を受ける。

安心安全に歩くことができる歩行空間を確実に整えていくことが、夜間のまちの回遊性向上にもつながると期待できる。



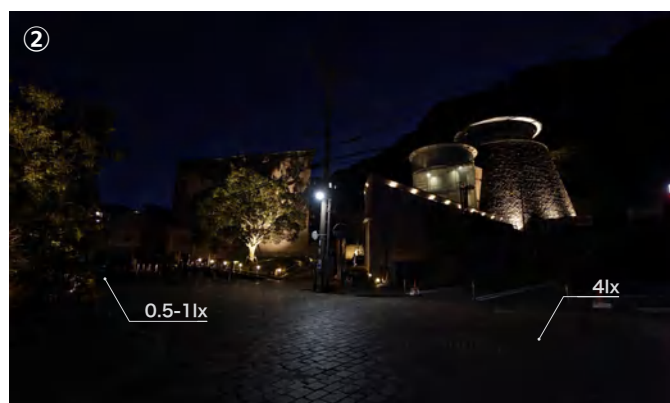
市立美術館の横の通りは、低い色温度で統一された歴史と文化の道とは異なり、高い色温度の真っ白い照明器具が街路灯として設置されている。



明るさは十分すぎるほどで、石畳の情緒的な雰囲気に対しては白々しい印象を感じる。発光部のグレアも強く、まぶしい。



かごしま近代文学館・メルヘン館は、夜になると、その特徴的な建物を際立たせるようなドラマティックなライトアップが行われている。



電球色で統一された明かりが、あたたかみややさしさを感じさせる。20時には消灯してしまい、それ以降は周辺の一帯が真っ暗な闇に沈んでいる。



かごしま近代文学館・メルヘン館から照国神社へと抜けていく通り。石畳が続き、路地のように散策する楽しさのある通りになっている。



夜になると街路照明はまばらで、自販機や看板の明かりが自然発生的な光環境を作っている。

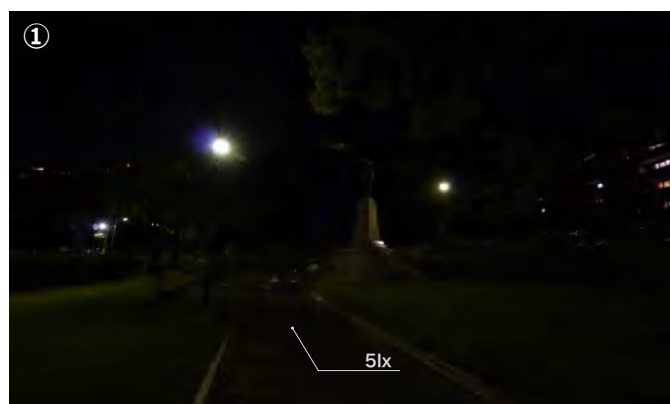
(6) 探勝園

島津久光公・忠義公の銅像がある探勝園は、背景の城山まで立体的に連続していく豊かな緑や水辺によって、憩いの空間が広がっている。ただ、夜に訪れると、闇そのもののよう空間が奥に続いていた。

原生林にも続く場所であるため、環境に配慮した明かりを用いる必要はあるものの、周囲に暮らす人々がふと足を止めるような夜の景色をつくることも考えられる。



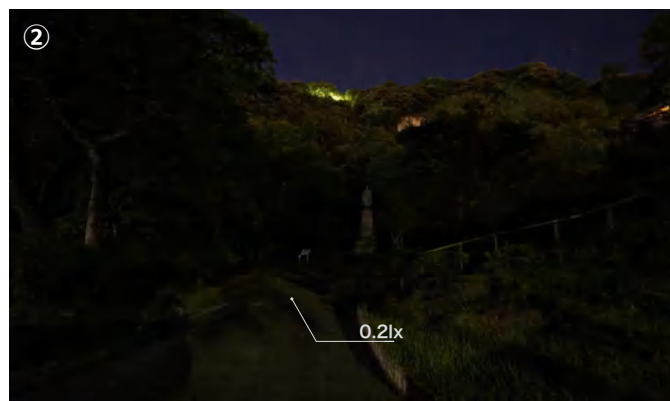
島津忠義公の銅像が立つ入口。背景の城山には、ちょうど正面に城山展望台が見える。



グレアの強い光を全方向に発する街路灯が立っており、眩しさとの対比で周囲が余計に暗く感じられた。逆に、足元の段差があるところや照らされるべき銅像には、適切な光が与えられていない。



緑に囲まれた憩いの場として、城山に徒歩で登る際の入口として、昼間には水と緑の美しい景観が楽しめる。



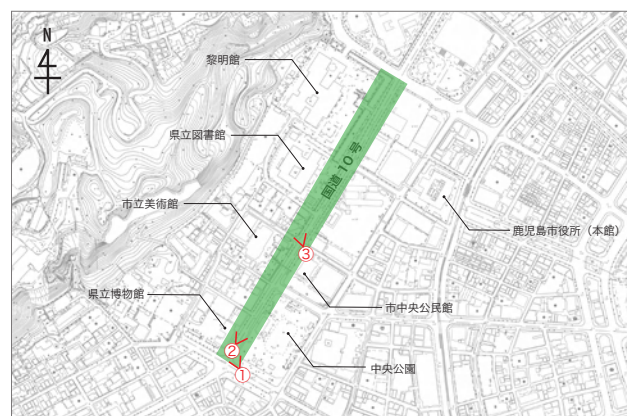
夜は完全に闇となっており、訪れる人もいない。歩行のための照明もほぼなく、路面の照度は月明り程度。

(7) 歴史と文化の道

国道 10 号の終点にあたる歴史と文化の道は、道沿いに多くの史跡や文化財が集まり、石垣や石塀が続く、風格ある美しい景観となっている。

夜になると、歩道にはガス灯の明かりが灯り、ロマンチックな情緒を演出しているが、車道を照らす街路灯などにグレアを発するものが多かったり、色温度が空間全体で統一されていないと、ガス灯の風情が損なわれているような、バランスの悪い印象を受ける。

この地域の顔となる道の風格を夜にも感じさせるために、光の原則を守ることが徹底し、不快な光や不均一な光を丁寧に取り除きながら、美しく心地よい景色を明かりで呼び起こす必要がある。



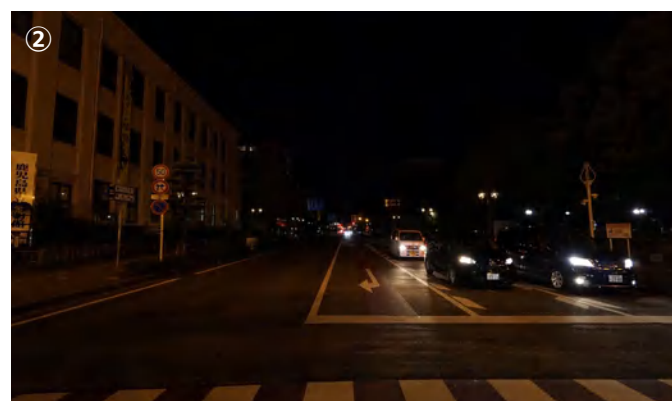
① 照国神社前の交差点。



① 県立博物館の建物が照らされて見えるが、白い外壁が街路灯の光を受けて明るく見えているだけで、意図的なライトアップではない。昼間は存在感があった鳥居は、夜には闇に沈んでいる。



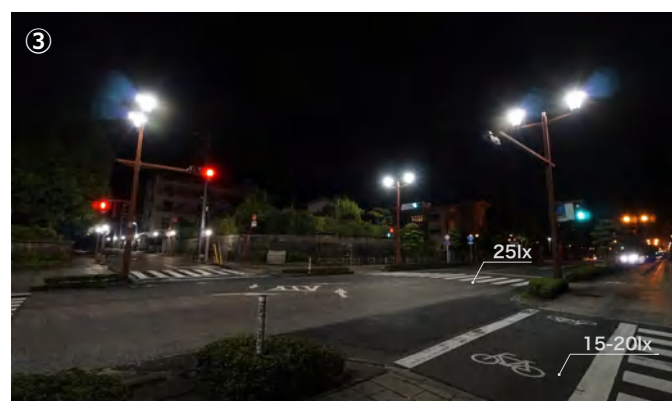
② 照国神社前の交差点から、歴史と文化の道を見通す。



② 道路に面した明かりがなく、路面も暗く、市街地の幹線としては非常に暗い印象を受ける。道の先に何があるのかわからず、歩いて行こうと思える期待感を抱くのは難しい。

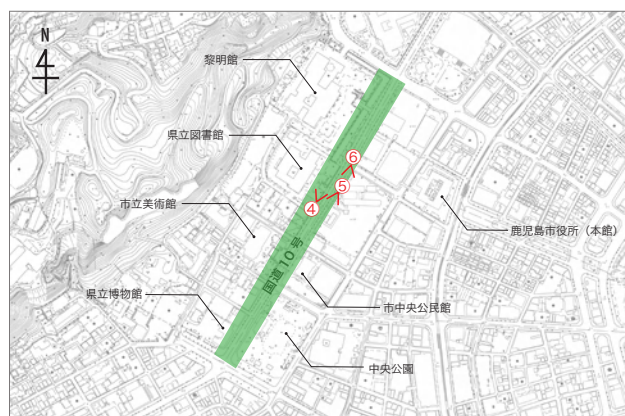


③ 市立美術館前の交差点。夜には、唐突なほど明るい空間となっている。

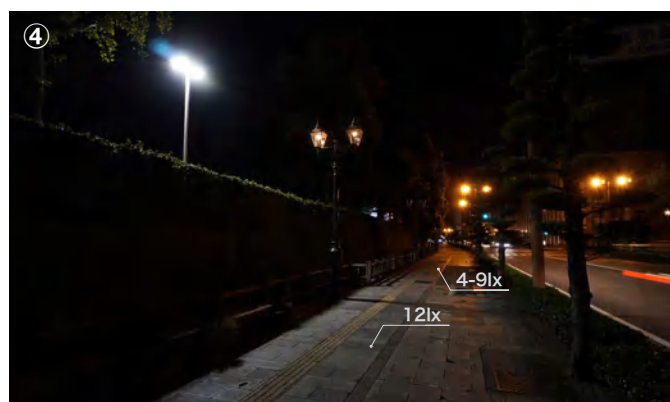


③ 高さのある街路灯に付けられた、周囲と比べて格段に色温度が高くまぶしい光源によって、空間全体が白く照らされており、ガス灯の優しい雰囲気損なわれてしまう印象である。

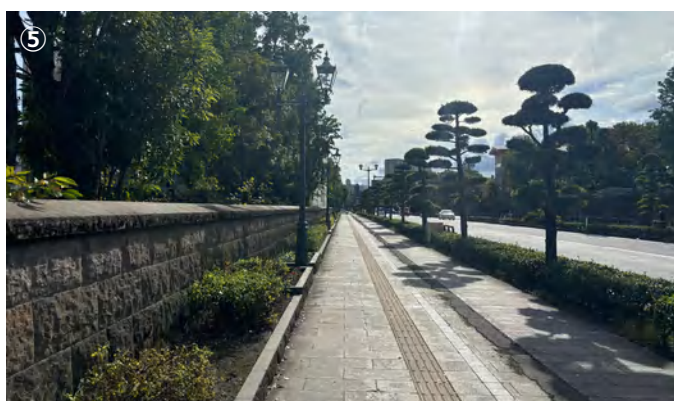
(7) 歴史と文化の道



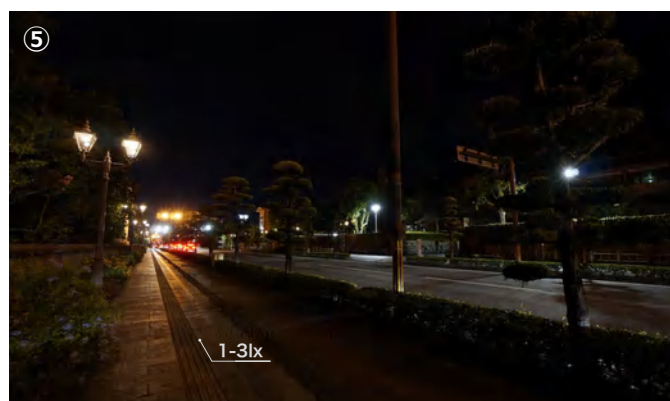
県立図書館前は、石垣と水路が美しく続く、歴史と文化の道らしい心地よい歩行空間となっている。



夜にはガス灯がともし、情緒的な雰囲気を感じるが、県立図書館内から漏れてくる色温度の高い光がグレアを発している。そのまぶしさで石垣が完全に影となり、景色が暗く沈んで見えてしまう。



名山小学校の通り。花壇と石垣がきれいに整備されていて、こちらも心地よい歩行空間が続く。



市立美術館前交差点の青白い街路灯の光は、ここまで離れてもまぶしく見える。対面の県立図書館敷地内の光も、反対側の歩道まで届いている。



名山小学校横の交差点。車道の街路灯の光と、歩道のガス灯の光によって、路面の照度は必要十分に保たれている。

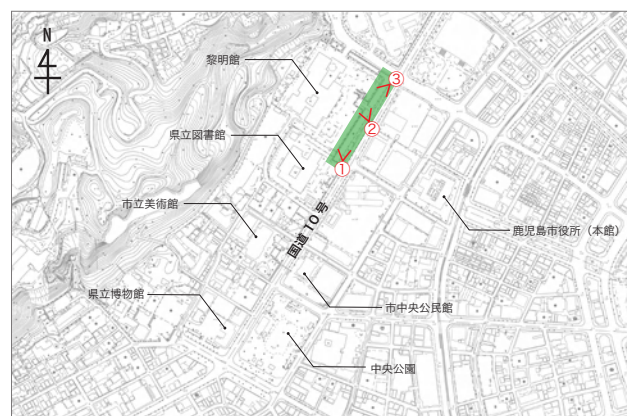


石垣や植栽や建物といった、視線に入りやすい鉛直面にも明るさがあれば、昼間のようにまちなみの奥行きを感じやすくなり、より心地よい景観となると考えられる。

(8) 鹿児島城跡、御楼門

明治時代の焼失から約150年を経て復元された御楼門。まちなみに風格を感じさせる景色の顔となっており、城跡内の黎明館には多くの人々が日々訪れている。城跡の石垣を囲む濠には、季節になると蓮の花が咲き誇り、美しい景観を形成している。

夜にはフルカラーの投光器によるライトアップが行われており、煌々と照らされているが、周囲が逆に暗く感じられたり、消灯後の暗さが極端に寂しく際立つような印象を受ける。



鹿児島城の石垣は、夜には御楼門とともにフルカラーの投光器によって照らされる。



離れた位置から見たときにも目立つ明るさだが、少々パワーが強すぎて、石垣の凹凸や苔の表情が感じにくい。また、堀側の明るさとの対比で、手前に開ける歩行者の空間が暗く感じられる。



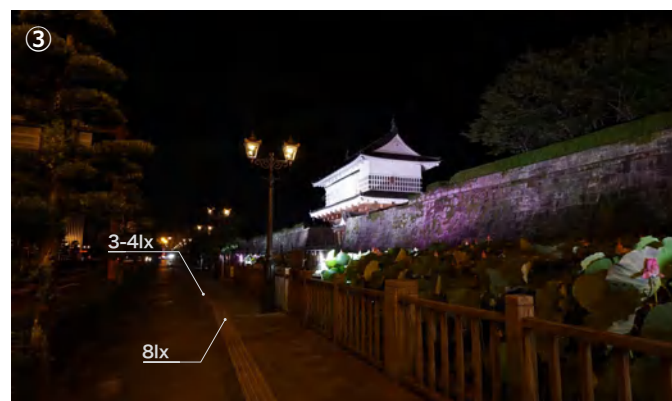
御楼門は、明るく照らされると、その白さが空の闇からくっきりと浮かび上がる。



ランドマークとしてはふさわしい主張だが、歴史の情緒をより感じさせるには、もう少し繊細で穏やかに照らすことも考えられる。



夏場には蓮が生育し、立派で美しい花を咲かせる。石垣に向けられた投光器は、場所によっては蓮の葉で光がさえぎられている。



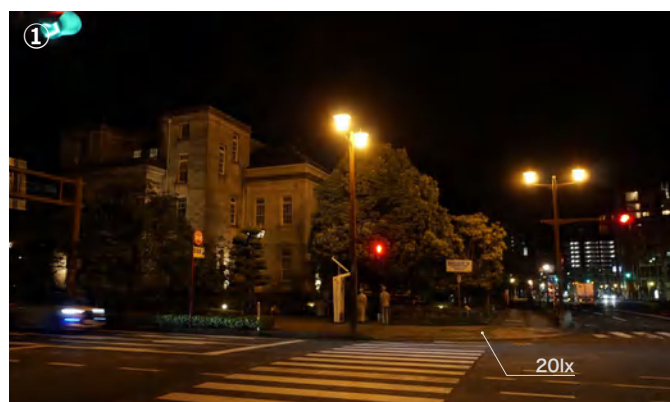
濠の蓮も美しい景観の要素であるので、蓮に対する光も考慮した照明の検討が必要と感じられる。

(9) 県政記念館周辺

旧鹿児島県庁舎の玄関部分を移設した美しい建物で、人々に親しまれている県政記念館。城山入口交差点に面するポケットパークには、鹿児島の歴史を案内する「時標」のパネルと人物像が立ち、まちなかに表情を与えている。夜間には落ち着いた印象のライトアップが行われ、美しい佇まいを演出している。人通りや交通量の多い交差点側からも、夜の雰囲気が感じ取れるようになると、より心を惹かれるまちかどになることが期待できる。



昼間は交差点からもその瀟灑な建物のようすが感じられる県政記念館。



夜には、街路灯のナトリウムランプの光を受けて、意図が感じられない明るさでぼんやり照らされている。建物としては裏側にあたるためか、交差点側に施されているライトアップは少ない。



ガス灯が続いていく通り。



ポケットパーク周囲の明かりもないが、交差点の街路灯が十分に明るいため、交差点の近くは空間全体がオレンジ色に染まっている。



県政記念館の裏側を抜けていく。

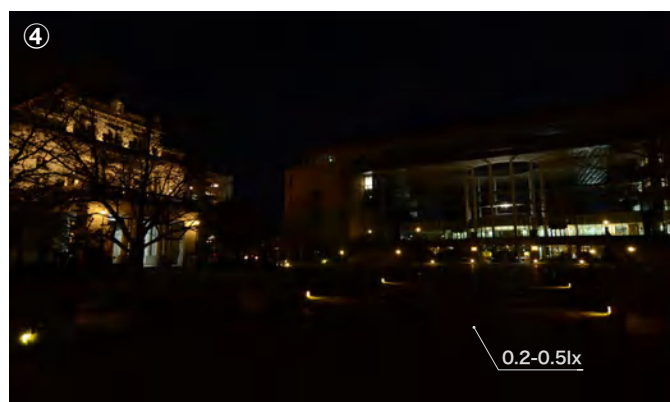


交差点の光が届かなくなると、歩道の明かりはガス灯のみとなる。樹木の下に県政記念館のライトアップが見え、奥行きを感じる。

(9) 県政記念館周辺



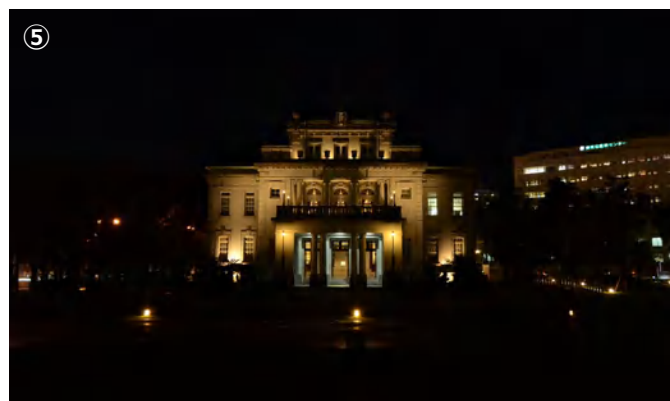
県政記念館と県民交流センターが面する広場。整備され、都市的な風格がある。



夜には、低い位置に灯る電球色の明かりが適切なバランスで配置されており、照度の値が低くても、建物の明るさ感も感じながら歩くことができる落ち着いた空間になっている。



県政記念館を正面から見る。



ライトアップは、建物の形状を際立たせる品の良いもので、ロマンチックな雰囲気演出している。あたたかみのある電球色の照明によって広場全体が統一されているのも美しい。



フットライトの灯具はベンチに仕込まれており、景観への配慮が感じられる。

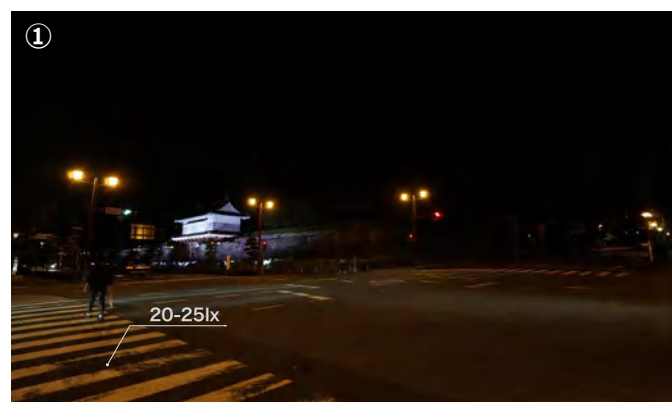
(10) 城山入口交差点、薩摩義士碑

城山入口交差点は、幅員の広い道路が交差し、歩行者のスケール感に対して広々と開けた空間になっている。御楼門と鹿児島城跡を臨む眺望の背景には城山が続き、都市景観と歴史・自然景観が調和した景色が広がる場所である。夜には、東側のみ強いライトアップが行われている城跡や、ガス灯の雰囲気をもつナトリウムランプの街路灯など、明るさと暗さの対比が強く、全体的にアンバランスな印象を受ける。

昼間のような雄大で鹿児島らしい景色を、夜にも感じることが出来る場所になることが期待できる。



昼間の交差点。鹿児島城跡の後ろに、城山の木々による豊かな緑が続いている。



広い交差点には、街路灯のナトリウムランプの光がただ広がっている。御楼門が明るく浮かび上がって、シンボリックな存在感を主張している。城山の緑は感じられず、交差点の奥は闇のような印象を受ける。



鹿児島城の濠に沿って城山に向かう道。ライトアップが行われているのは御楼門側の一面のみ。



北御門の周囲は真っ暗で、御楼門側との対比もあって、闇が迫ってくるような印象を受ける。数値だけで見ると、車道用の街路灯によって照度は意外と出ているものの、心地よさは感じにくい。



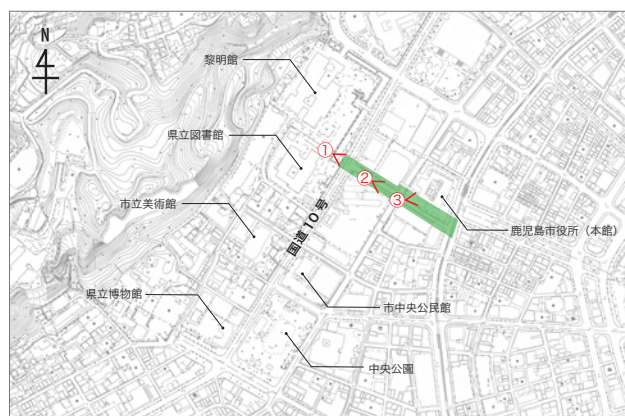
薩摩義士碑。夜になると、電球色の明かりで照らされてやわらかく浮かび上がる。



薩摩義士碑に至るまでの歩道や階段が非常に暗い。空間全体の明るさを感じさせるような鉛直面を照らす明かりも周囲にはなく、夜間にここを訪れたいという気持ちを抱くのは難しい。

(1 1) 鹿児島市役所西別館横（市道山下2号線）

歴史と文化の道から、電車通りやみなと大通り公園へとつながる道路。市街地の回遊性を高める重要な通りである。昼間は、市役所中庭の緑や庁舎が道の奥に見通せるが、夜になると、道路用の照明が非常に少なく、闇に沈んだような真っ暗な通りとなっている。歩行者が歩いていきたいと思えるような、安心感を与える光環境が必要である。



鹿児島城跡前の交差点、奥には鹿児島市役所。



歴史と文化の道と電車通りをつなぐ、動線として重要な場所にあたるが、夜には道の先が闇に沈んでいて、どこに続く道なのかわからない。



日中は、不都合を感じない歩行空間となっている。



歩行者の回遊性を高めるためにも、不安感を与えないような明るさ感が続いていることが望ましい。



市役所の中庭は、庁舎を訪れる人々や職員の憩いの場にもなっている。



市道山下2号線の暗さに比べて、整備された中庭の明るさは抛り所のように感じられる。光源部分の輝度を低減するために、もう少しまぶしさに配慮する必要がある。

(1 2) 鹿児島市役所本館周辺

市役所周辺は、歴史景観エリアに近接し、来庁者だけでなく、鹿児島空港連絡バスを利用する観光客や、桜島フェリーターミナルをめざす人々も行きかう場所となっている。国の登録有形文化財にも指定されている歴史ある本館は、市電やみなと大通りからもよく見え、その佇まいから風格を感じることができる。堂々とした本庁舎の姿を、鹿児島市の顔として夜間にも印象づけられるような光環境が形成されることが望まれる。



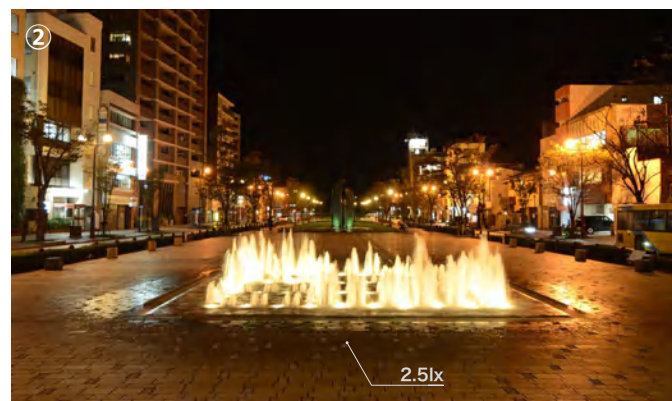
① みなと大通り公園に正対して建つ市役所本館。



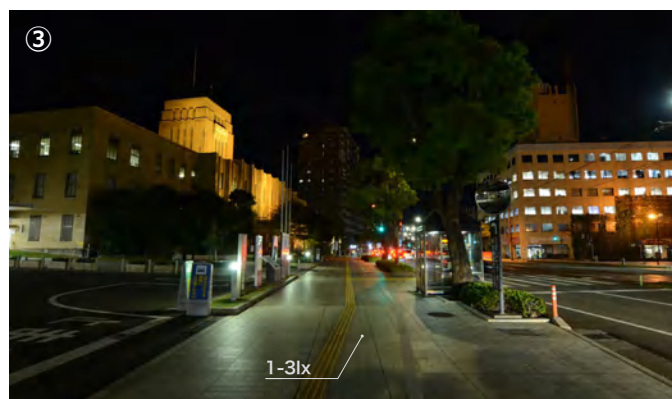
① ナトリウム灯を光源とした投光器により、レリーフのある建物中央部を強調するように照らし出されている。セットバックする建物の形状に沿って器具が配置され、全体に光が届いている。



② みなと大通り公園を見通す。広々とした通りの奥には桜島の稜線が見える。



② みなと大通りの街路灯はナトリウム灯が続いている。あたたかみのある印象は好ましいが、演色性の悪さや輝度の強さは改善されることが望まれる。噴水の光が効果的なアイストッブとなっている。



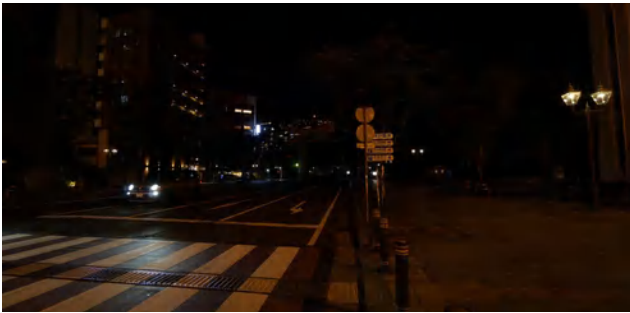
③ 市電の通りは市庁舎に向かってカーブしているため、離れたところからもライトアップされた本庁舎が目に入りやすい。

4．より魅力的な夜間景観のために

4-1. 現状調査から見てきた課題点

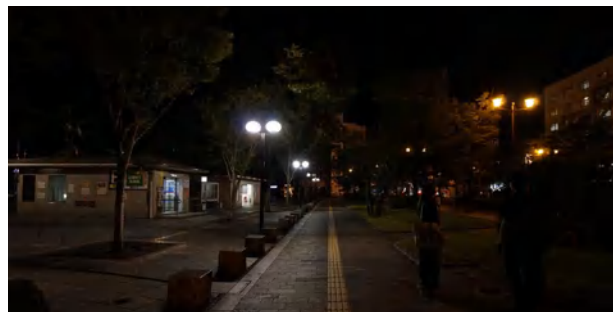
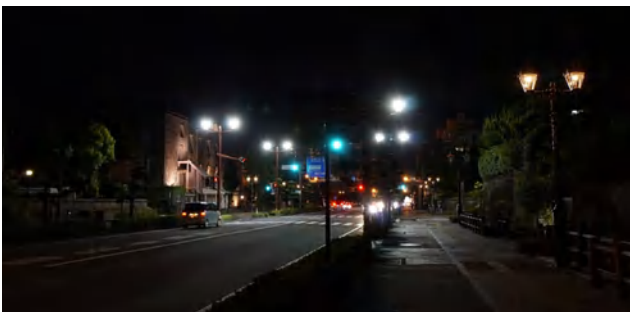
・ 歩行に不安を感じる暗さ

…歩行者にとって足元の明るさが必要なところで暗がりがあったり、路面の照度は足りていても、視界における明るさ感に欠けていて不安を覚える街路が多い。



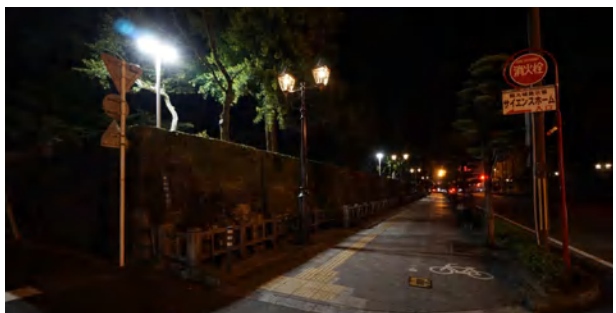
・ 統一感のない光

…色温度の異なる光源が近くに混在しており、それぞれが打ち消しあっているような印象がある。照らす対象や周辺環境に合わせる意図が感じられず、演色性の低い光源も多く含まれている。



・ 不快なまぶしさ

…過剰にまぶしいと感じる照明器具が多く見受けられ、目に優しい快適な視環境が損なわれている。そのまぶしさとの対比で周囲を暗く感じたり、逆に不要な光漏れが発生しているところもある。



4-2. 歴史景観エリアの夜景のキーワード

歴史景観エリアにおける課題点を改善し、
「大切にすべき光のルール」にもとづき夜間景観を形づくることで、
訪れる人々が鹿児島県の歴史や文化などの魅力を堪能できるように、
3つのキーワードを定めます

「 にぎわいと安心 」

…夜の回遊性を高め、いづろ・天文館地区のにぎわいを歴史景観エリアまでつなげる
…回遊動線となっている街路で、安心・安全に歩ける機能的な明るさを確保する

「 物語るまちなみ 」

…まちに溶け込んでいる歴史や文化の足跡を、あかりで呼び起こし、
まちなみが語りかけてくるような豊かな時間を生み出す

「 息づく自然 」

…身近にあふれる豊かな自然を、夜にも心地よく感じられるようにする
…環境に配慮した照明により、自然の暗さを守り、未来へ受け継いでいく

4-2. 歴史景観エリアの夜景のキーワード

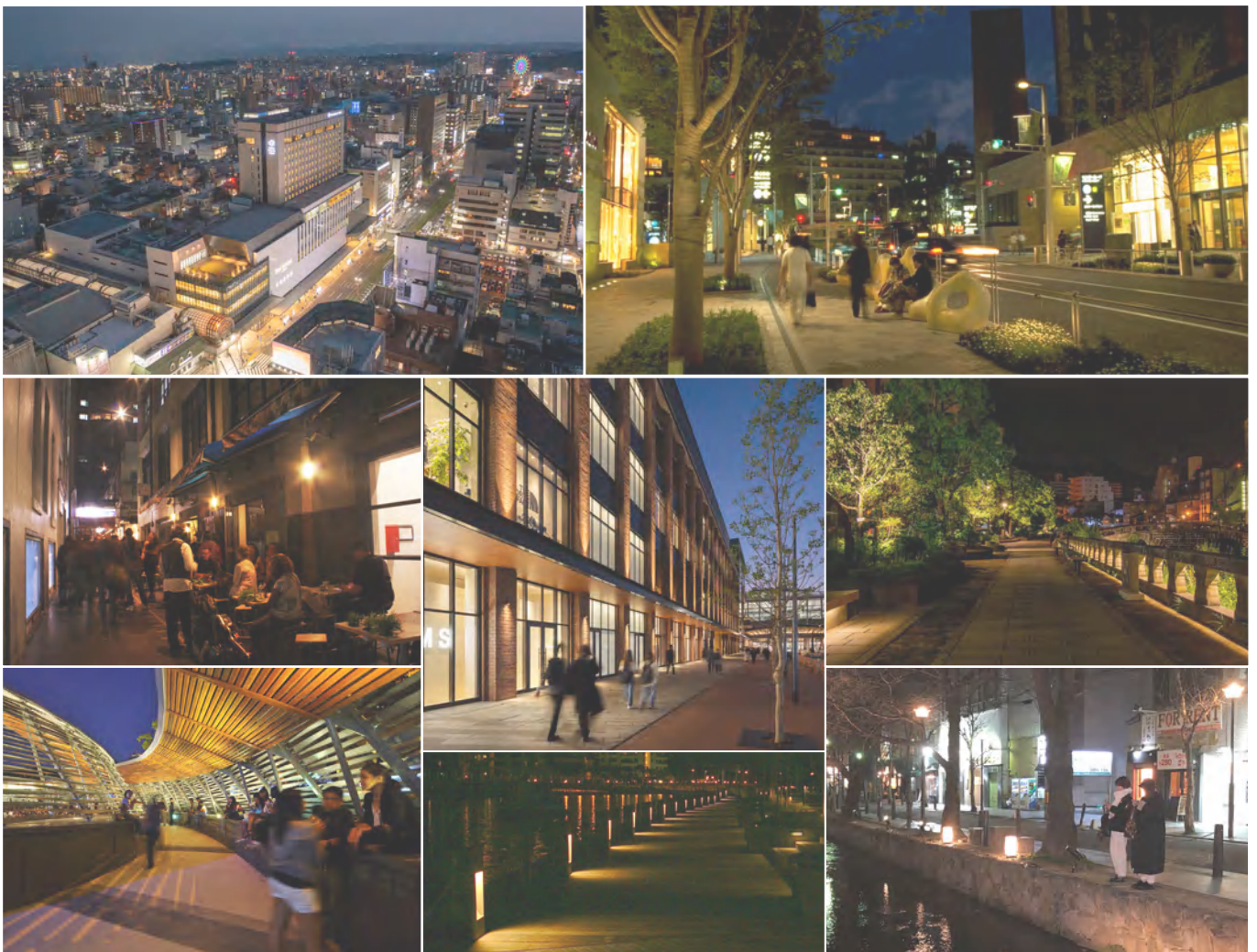
「にぎわいと安心」

- …夜の回遊性を高め、いづろ・天文館地区のにぎわいを歴史景観エリアまでつなげる
- …回遊動線となっている街路で、安心・安全に歩ける機能的な明るさを確保する

温暖な気候の鹿児島市では、日没の時間も遅く、夜間に屋外を出歩きやすい。とくに天文館通りのような繁華街やアーケードを中心とした界限では、夜遅くまでのにぎわいが続いている。

鹿児島らしいゆったりとした夜の時間を楽しむために、誰もが安心して市内を散策できるような、夜にも心地よい街路空間を整備していくことが重要である。

歴史景観エリアはにぎわう繁華街からも連続しており、このエリアを夜間散策の目的地として考えることで、回遊性の向上を図る。



4-2. 歴史景観エリアの夜景のキーワード

「物語るまちなみ」

…まちに溶け込んでいる歴史や文化の足跡を、あかりで呼び起こし、
まちなみが語りかけてくるような豊かな時間を生み出す

鹿児島のまちには、近代日本の発展につながる歴史が色濃く残っている。遠い過去ではなく、今の私たちにつながる物語として、暮らしの空間に多くの足跡が溶け込んでいる。

普段なにげなく目にしているまちなみに、それらを呼び起こす意図を持った光を与え、陰影を効果的に作り出すことで、訪れる人々に対し、背後に広がるおぼろげなる空間を想像させ、豊かな精神的世界を出現させることができる。ランドマークとなる史跡・銅像・建築と、それらをつなぐ街路空間とを一体的に考えたエリア全体の面的な整備によって、訪れる人々が物語をたどるように、鹿児島の歴史や文化などの魅力を再認識し、夜間の散策が豊かな時間となるようなまちなみとする。



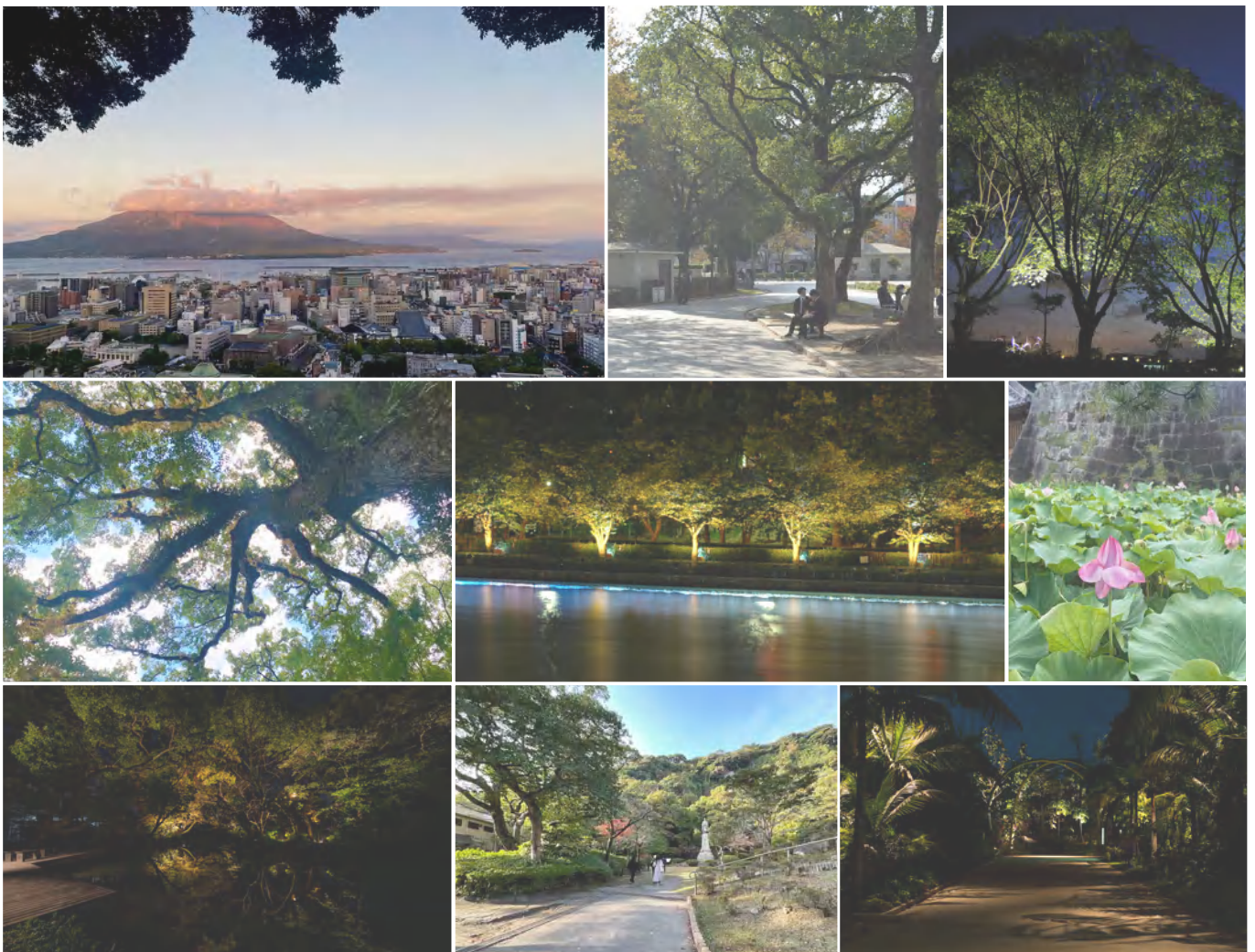
4-2. 歴史景観エリアの夜景のキーワード

「息づく自然」

…身近にあふれる豊かな自然を、夜にも心地よく感じられるようにする
…環境に配慮した照明により、自然の暗さを守り、未来へ受け継いでいく

歴史景観エリアでは、公園の木々、街路樹や道沿いの花壇、安らぎを与える水路など、市街地にありながらも自然を身近に感じることができる。景色の背景にも、隣接する城山の樹林が豊かな緑を湛えている。緑と花々の色彩や、季節の移り変わりを、昼間だけではなく夜間にも感じとることができれば、鹿児島県のまちはより魅力的なものになる。

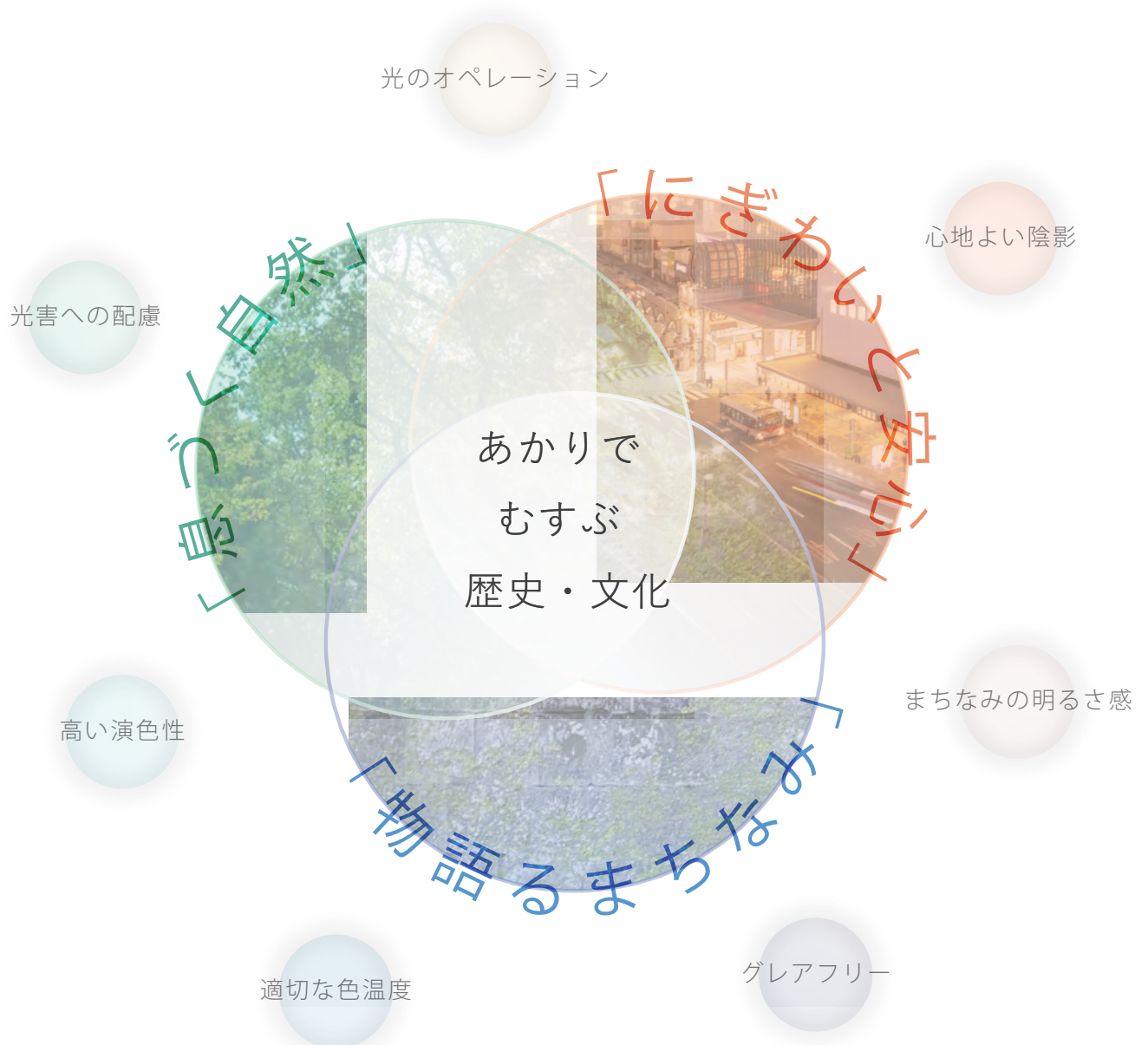
また、元来、自然界の夜とは、月明りや星明りを惹きたてるような心地よい闇が満ちているものである。ただ明るく照らし出すだけではない、自然のために優しい照明を考えることで、環境や光害に配慮する。



4-3. 歴史景観エリアの夜間景観形成の目標

- あかりでむすぶ歴史・文化 -

歴史的・文化的なまちなみを活かしてこれまで点で形成されていた夜間景観に対し、統一感があり心地よく環境に配慮したあかりによって、面的な連続性を持たせていくことで、夜間の回遊性向上を図り、よりにぎわいと安心感のある夜間景観を目指す。

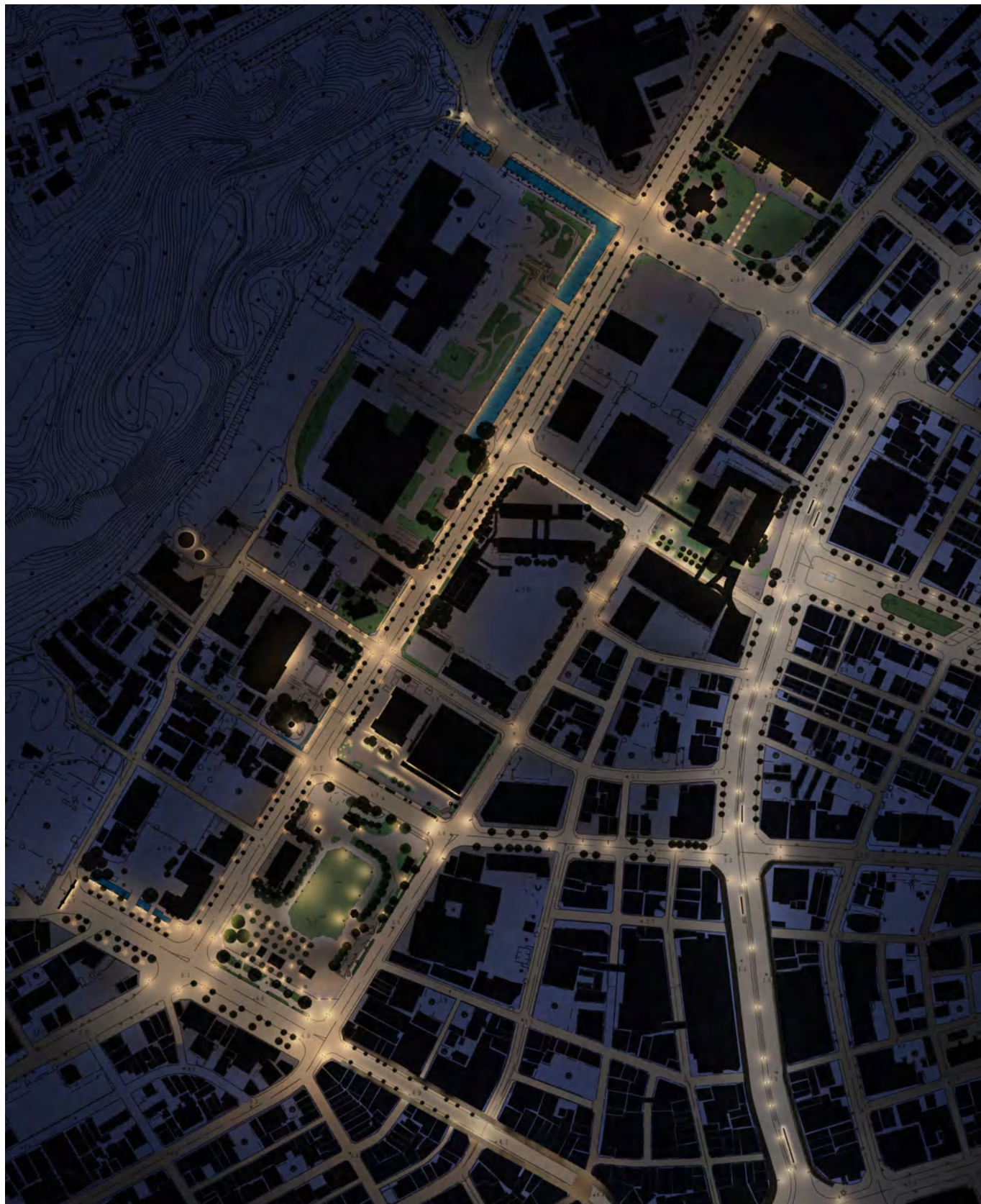


地域にとって身近で愛着のある景観を、夜間も魅力的で歩きたくなる空間として創出することで、そこに暮らす人々の生活を豊かにし、訪れる人々にとっても鹿児島県の歴史や文化などの魅力を堪能することができるエリアとするため、光のルールを基盤とする「にぎわいと安心」、「物語るまちなみ」、「息づく自然」の3つのキーワードが交わる先に「あかりでむすぶ歴史・文化」を目標として定める。

5 . 整備イメージ

5-1. 整備の基本的な考え方

現状調査から見てきた課題点を改善し、歴史景観エリアの夜間景観形成目標を実現するため、大切にすべき光のルールに配慮した統一感のあるあかりによる具体的な整備イメージを検討する。



5-2. 「大切にすべき光のルール」の適用

歴史景観エリアにおいては、

「大切にすべき光のルール」を、以下のように適用していく

・心地よい陰影	公共の歩道で1～10ルクス前後、広場や園路で0.5～10ルクス前後、 交差点で15～30ルクス前後 ただし明るさ感や周辺環境も考慮して計画する
・まちなみの明るさ感	石垣のような景観要素のライトアップや、樹木のライトアップ、 建物外壁のライティングを適切に行う
・グレアフリー	車道や歩道の街路灯を、グレアに配慮のある仕様とする (カットオフ型やセミカットオフ型の器具の選定、 輝度の抑えられたランプへの変更など)
・適切な色温度	歴史景観エリアのまちなみを惹きたてるため、 2400～3000K程度の低い色温度で統一する
・高い演色性	Ra80以上を基本とする
・光害への配慮	照射対象以外への不要な光漏れがないように、 照明器具の仕様（グレアカットフードや適切な配光など）や 設置時の納まりに配慮する
・光のオペレーション	時間帯によるライトダウンを行い、環境への影響や省エネに配慮する 四季によって照度や色温度の異なる照明シーンを設定する

5-3. 整備箇所の検討

本計画におけるライトアップ等整備に際しては、夜間の回遊性向上を図るため、既存の夜間景観施設の明るさがつながるように回遊動線を想定して整備箇所を選定し、魅力的で落ち着いた歴史景観エリアの夜間景観形成をめざす。



(1) 照国神社線

現状（昼）



幅員の広い歩行空間が整備されており、照国神社の大鳥居や豊かな樹林が視線の先に見える。歴史と文化の道沿いに続いていく水路の起点ともなっている。

現状（夜）



歩行空間のための照明が少なく、ガス灯の雰囲気ある明かりだけでは機能的な照度が足りていない印象。県道の街路灯によるナトリウムランプの光が広がっているが、視線の先が暗がりになっている。昼間には印象的だった大鳥居や樹木は、闇に沈んでいてほぼ見えない。

5-3. 整備箇所の検討

(1) 照国神社線

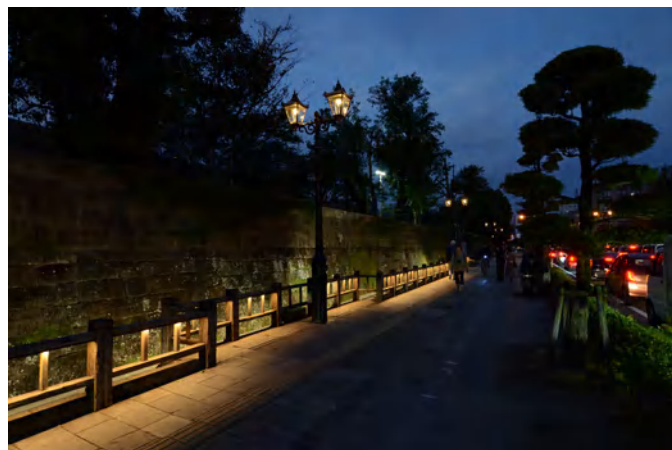
整備イメージ



歴史と文化の道沿いを流れる水路の存在をふちどるように、モデル箇所である県立図書館前と同様の手すり照明を木柵に設ける。木柵の反対側となる車道側には、グランドウォッシャーと樹木アップライトの二種の照明を一体化したボード型の照明器具を、既存の街路樹に対応した配置で設置する。広々とした歩行空間にリズムカルな光だまりが続き、周囲の街路樹がやわらかくアップライトされることで、その先に歩いていきたくなるような期待感を備えた奥行きが生まれる。



グランドウォッシャーとアップライトが一体化されたボードの事例。実際の設置条件等に合わせ、サイズや配光を検討する。



県立図書館前で整備された手すり照明の様子。ガス灯のやさしい明かりとも調和しながら、歩行空間に明るさと誘導性を与えている。

5-3. 整備箇所の検討

(2) 中央公園

現状（昼）



歩道とゆるやかにつながる空地が、中央公園に人々を迎え入れる空間となっている。

現状（夜）

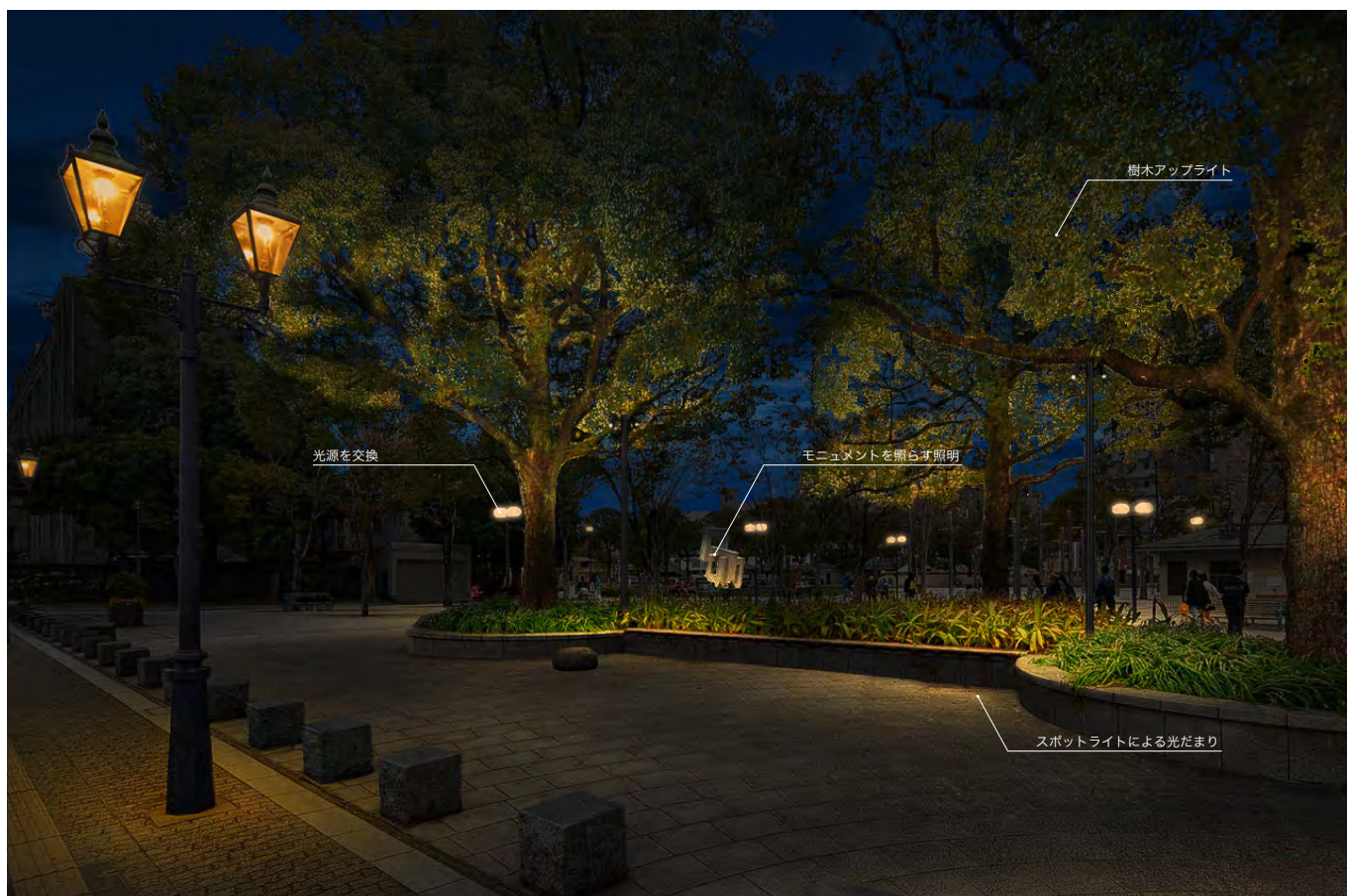


公園内のポール灯がまぶしく、その白色の光のグレアが点々と際立って見える。ポール灯以外の存在が暗く感じられ、公園の奥の様子が感じ取りにくい。

5-3. 整備箇所の検討

(2) 中央公園

整備イメージ



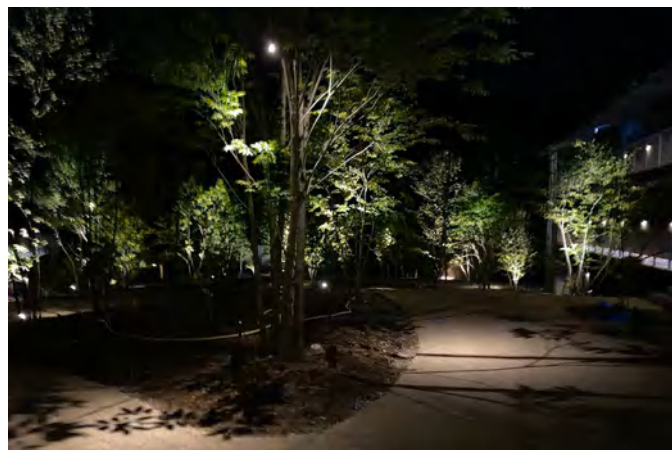
ベンチにもなっている植栽帯のまわりをやわらかく照らすため、ポール上部にスポットライトを取り付けて、高い位置からグレアのない光を与える。曲線的な形状を強調するような光だまりによって、公園内に迎え入れられるような表情をつくる。

頭上を覆うような入口の樹木に対してはアップライトを行い、離れたところからも公園の緑が感じられるように演出する。

公園内の街路灯は、まぶしさを感じずあたたかみのある雰囲気を感じられるように、適切な光源に変更したり遮光や減光等を行う。



ポールに取りつけたスポットライトによる光だまりの事例。
グレアのない光で路面を広範に照らし、歩行者を迎え入れる。



木漏れ日のような光だまりの陰影と、樹木アップライトによる事例。
緑のさまざまな表情が感じられる。

5-3. 整備箇所の検討

(3) 中央公民館前

現状（昼）



フोटスポットの花壇を前景に、中央公民館と県文化センターが面する広場の開放的な様子が見通せる。

現状（夜）



ライトアップが行われている中央公民館の存在感が際立つ。周囲は車道のナトリウム灯からの光がぼんやりと届くのみ。

ヤシの木 アップライト

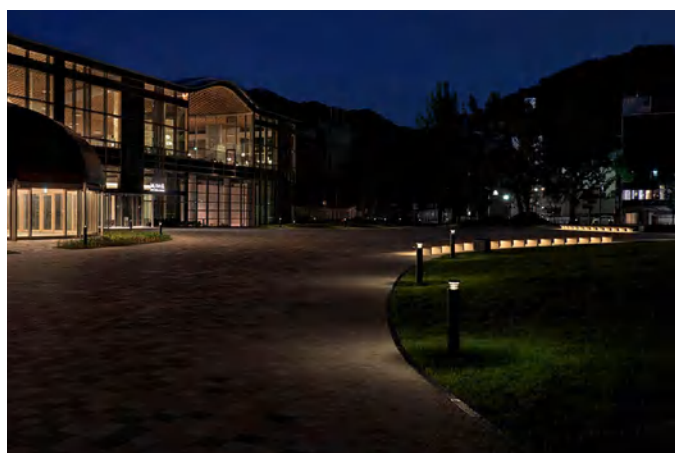
小松帯刀像
ライトアップ

ポラード照明

手すり照明

階段照明

すでにライトアップが行われている中央公民館の周囲は、アプローチ部分に間接照明（手すり照明など）を設けて足元を照らすことで、連続性を高める。



48

5-3. 整備箇所の検討

(4) 名山小学校前

現状（昼）



小学校の石塀沿いには花壇が整備されており、路面も整備された心地よい歩行空間が続いている。

現状（夜）



市立美術館前交差点の青白い街路灯の光がまぶしく見えていたり、対面の県立図書館敷地内の光が届いていたり、周辺からの光によって結果として路面の照度が確保されている状況。

5-3. 整備箇所の検討

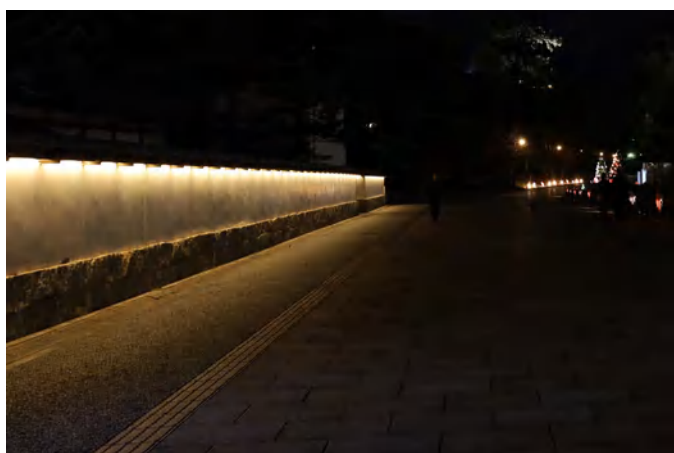
(4) 名山小学校前

整備イメージ

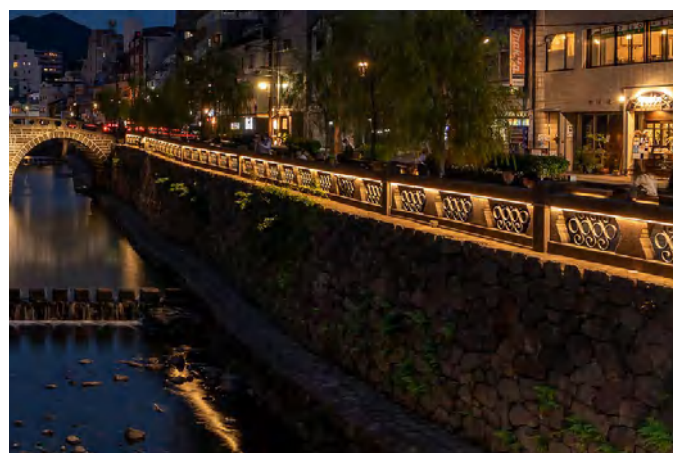


道に沿って続く石垣に対し、笠木の部分などを利用して間接照明を設ける。下方かつ前方に向けた配光し、石垣だけでなく、下にある植栽帯の花々や歩行空間の路面に光を広げられるよう計画する。

シンプルな照明手法を丁寧におこなうことで、石垣の陰影や植栽の緑による明るさ感が道沿いに続き、ガス灯の明かりが点々とアクセントになって、心地よく歩いていきたくなる景色が生まれる。



塀の笠木部分に間接照明が設けられている事例。白壁が照らされることで鉛直面の明るさ感が感じられ、路面まで届いた光は十分な照度を確保している。



石材の笠木部分を利用した間接照明の事例。連続した明るさ感が、空間の奥へと視線を誘導する。

5-3. 整備箇所の検討

(5) 鹿児島市役所本館

現状（昼）



市役所本館の佇まい。風格のあるファサードがみなと大通りに面している。

現状（夜）



ナトリウムランプを光源とした投光器でライトアップされており、建物の中央が各階に置かれた照明器具で強調されている。

5-3. 整備箇所の検討

(5) 鹿児島市役所本館

整備イメージ

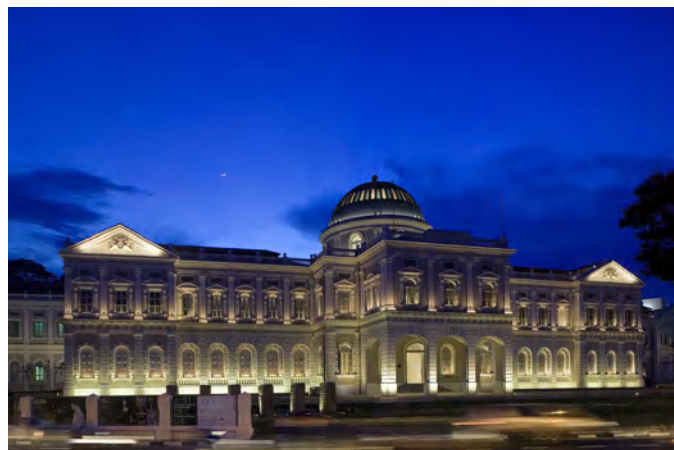


セットバックしていく建物の形状に合わせ、影が出ないよう各層に照明を設ける。壁柱にはアップライトをおこない、土台となる風格を演出する。レリーフに対しては、不自然な陰影が出すぎないように、真下ではなく少し引いた位置からスポットライトを照射して、建物の中央部分で視線を惹きつけるようなハイライトを計画する。

建物の両翼部の形状も見せるため、角部を投光照明（フラッドライティング）によってやわらかく照らす。また、前景の樹木に対しても、合わせてアップライト等を計画することで、より表情のある大通り沿いの夜景をつくる。



柱を印象的にライトアップしたファサード照明の事例。外観としての調和をはかるため、室内照明は窓際を電球色としたり、ブラインドを設けている。



歴史のある建造物らしい風格を感じられるファサード照明の事例。壁や柱、レリーフといった建物の凹凸に対して、繊細に照明の配置を計画している。

5-3. 整備箇所の検討

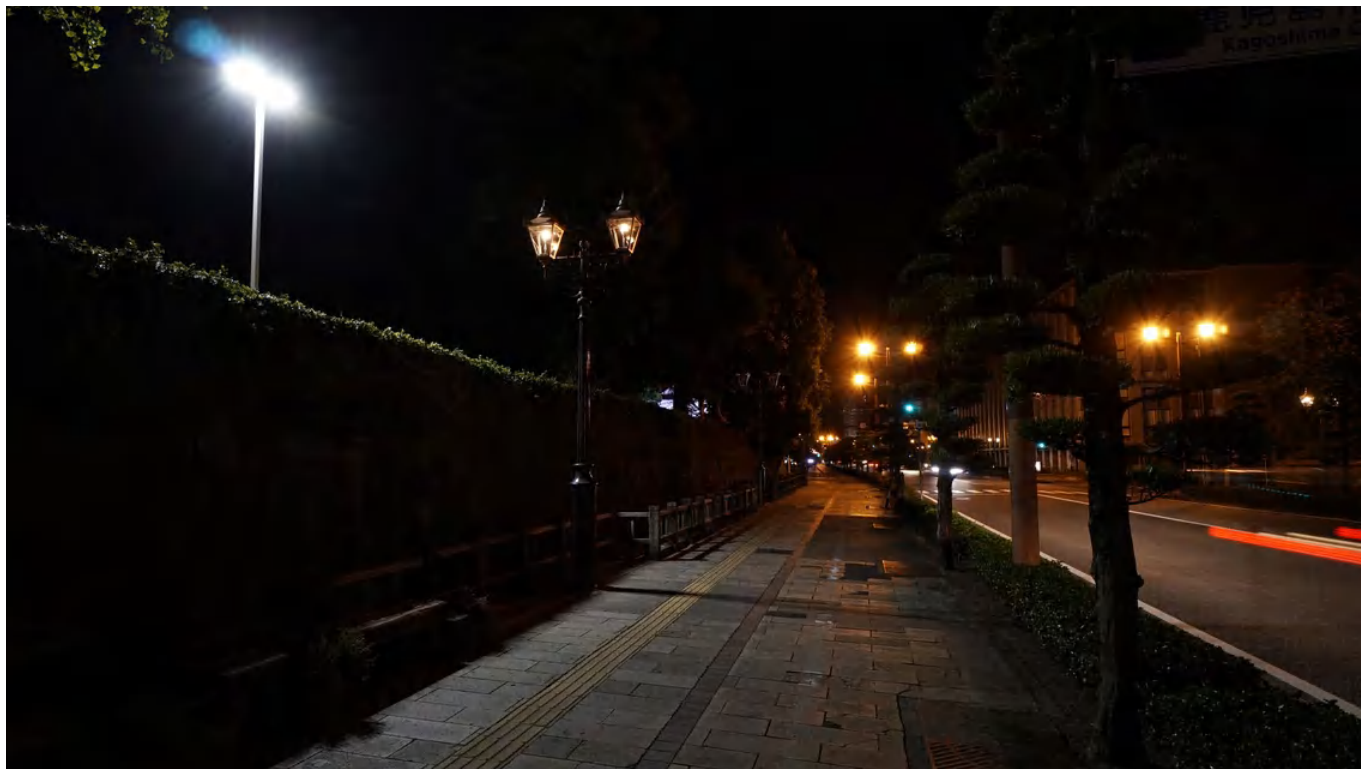
(6) 歴史と文化の道

整備前（昼）



県立図書館前は、石垣と水路が続く、うるおいのある心地よい歩行空間となっている。

整備前（夜）



整備前の様子。石垣が完全に影となり、景色が暗く沈んで見えていた。

5-3. 整備箇所の検討

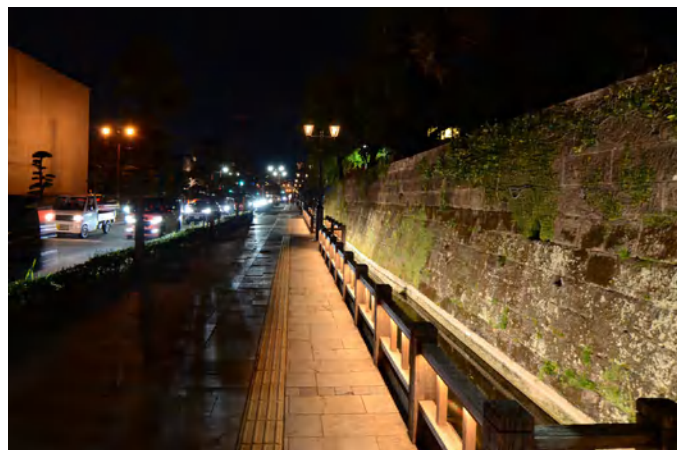
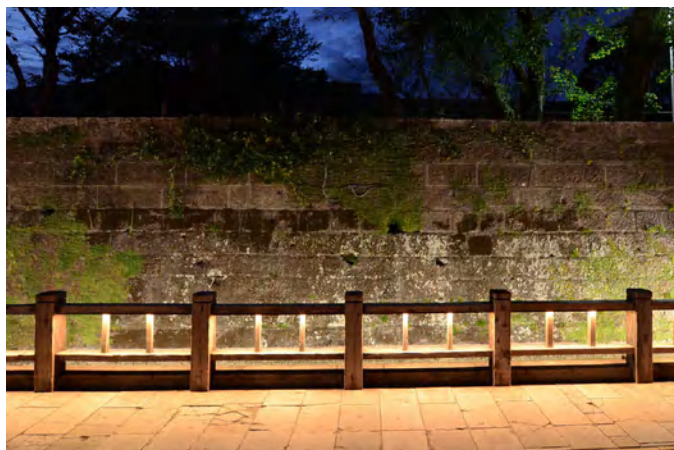
(6) 歴史と文化の道

整備後の様子（モデル箇所）



実証実験の結果をもとに、石垣へのライトアップと、木柵の手すり照明という、2種の照明要素を計画する。石垣を照らす光は、間接照明とスポットライトを併用し、西南戦争時の銃痕が残る凹凸や植物の緑を、陰影とともに演出する。手すりの照明は路面に十分な照度を与え、連続した光の帯が歩行者の誘導性を高めることで、夜間にも心地よく歩ける街路となる。

また、調色調光タイプの照明器具を用い、季節に応じた色温度による演出や、深夜帯における減光といったオペレーションを可能とする。



お問い合わせ先

鹿児島市 建設局 都市計画部 都市景観課
〒892-8677 鹿児島市山下町11番11号

TEL : 099-216-1425
FAX : 099-216-1398